
青空が見たいよ

りふえいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青空が見たいよ

【Nコード】

N7581S

【作者名】

りふえいる

【あらすじ】

その世界で不吉とされる虹と黒月鳥の存在。

そのふたりと仲間は次々と『大切なもの』を傷つけられ、失って、涙に濡れる悲哀の中で……ひとつの答えを見出す。

希望を捨てず、絶望に負けず、ふたりと仲間はその足を止めずに進んでゆく。

プロローグ

雨が降っていた。

冷たく、赤い。そんな雨が森を潤していた。

「どうして、こうなっちまうんだろうな」

「こ、の、うらざり……もの」

「そいつぁ、オレにとってはな。この上ない、ほめ言葉なんだよ」

「うぐあああああ」

血まみれで横たわる男の頭を踏みつけ、青年はその頭蓋を砕き割った。

赤い血だまりから離れて、青年は地面に突き刺さっていた黒羽の大剣を背負う。

「よつと」

左肩のほうにある大剣の柄を手で整え、いつでも抜けるようにしていた。

「つたくよ」

おたずねものも楽しじゃない。

青年は、自分の境遇を嘆いていた。

「今日だけでひいふうみい んつと、八つか。多いな」

青年が屠った賞金稼ぎは、八人だった。

中には女性、子どもまでいる。

「世の中、どうしてこうも荒れているのかね」

言いながら、青年は自分の心も荒んでいることを自覚した。

「近くに川があるな。そこで身体を洗うとするか」

血と泥で汚れた靴を見やり、青年はおもむろに歩き出した。

服を着たまま川で全身を清めて、青年は空をあおいだ。

「もう、止んだのか」

雲からのぞく太陽を見て、青年は安堵する。
黒い羽根帽子を被って、大剣をつかんで適当な樹木に寄りかかっ
た。

「おいおい。お前ら、もう少しおとなしくしろよ」

休んでいるジェットの肩に、小鳥達が集まってきた。

「服は脱いで、乾かしたほうがいいかねえ」

火でもない、ダメだなこりゃ。

青年はこのままでいいやと、腰を下ろして後頭部に両手をやる。

「眠いなあ」

はわわわわ。大きなあくびをして、全身びしょぬれで寝入ってしまおうか。

それじゃ風邪を引くなと思い、ズボンから湿った黒の外套を取り出そうとした矢先。

「~~~~」

不意に、奇妙な感覚にとらわれた。

「ん？ これは……」

久しぶりだった。

誰かに、呼ばれている。

「まだ、オレが記述された召喚書があんのかよ」

溜息について青年は、この場に現れた一筋の光に身を委ねた。

第1話

部屋の床に分厚い本を広げ、呼び出す歌を口ずさみ。少女は閃光を起こして、この場に青年を呼び寄せた。

「つたく、なんだあ？」

黒い羽根が部屋中に散らばる。

少女の眼前に、青年が現れた。

狭い部屋の天井に頭が触れそうな背丈で、腰まである黒い艶髪つやがみを振り乱している。

黒ずくめの服を着こなす、身体の線が細い青年だった。

「う、うう」

ボタン。少女は青年の姿を目にした途端に、気を失ってしまふ。

「ん？ なんだ。オレを呼び出したのは……な」

青年は、背中の大剣を引き抜くのを止めた。

倒れている少女の長い髪が、七色の輝きを持っていたからだ。

その少女の服装は白のシャツに藍色のスカートだけで、長いこと洗濯されておらず、染みや汚れが目立っていた。

「虹、だと？ こいつあ、珍しいな」

虹。

少女の髪は、光の当たり具合と見る角度によって色彩を変化させる、特殊なものだった。

それは、遊色あそびいろとも呼ばれる。

「おい」

青年は大剣を抜き、ゆっくりと少女の首に刃を突きつける。

「ちっ」

無反応。それが気に入らず、青年は大剣を背負った。

「おい」

ゲシッ。少女の腹部を軽く蹴るも、やはり反応はない。

「曲がりなりにも、オレを呼び出した主人だしな。いきなり殺すの

は惜しいか」

青年は屈んで、少女を抱き上げる。

近くにベッドがあったので、そこに放り投げた。

「にしても、せつめえ部屋だなあ」

青年は黒い羽根帽子を、少女の胸元に置いた。

「まだ、ガキか。にしちゃあ、痩せこけてんな」

青年は部屋を見回して、すぐにここが監禁部屋であることを見抜いた。

「あんまいいもん食わしてねえな」

石造りの建物にある監禁部屋。

床には本が散らかり、女の子らしいものはひとつも見当たらない。

家具は木製の本棚にベッド。そのふたつしかなかった。

「あれが扉か。木製なら、やれそうだ」

後ろを振り返り、少女の寝顔を見つめる青年。

「ふん。可愛い顔してるじゃねえの。けど、遊ぶに遊んだらそれまで」

口元を歪ませて、青年は扉の前に立つ。

「ほくらよつとおー！」

扉を蹴破り、それから少女のほうへ戻ろうとした。

「ん？」

が、青年はすぐに鼻につく臭いにおを感知する。

「こりゃ、獣くせえな」

青年は大剣を部屋の出入口に突き立てて、階段をゆっくりと下りていった。

石の螺旋階段を下ると、広い廊下に出た。

あまりにも天井が高く、迷路のように入り組んでいる。

下ってきた階段の数を踏まえて、青年はここはどこかの城だなと確信した。

「なんだ、こりゃ」

人の死体が、あたりにゴロゴロと転がっている。

「んん？ 人間……いや、こいつぁ」

正確には、人ではなかった。

耳が見たことある獣のだったり、鳥のだったり。

「共食い、か？」

そうとしか思えない傷跡が、血痕が、あちこちに残されている。

「こいつぁ、ちと厄介かもな」

まだ、生きてるのがちらほらと。

青年は、背中に手をやるうとして思い出した。

そっぴや、置いてきたんだっとな。

「ぐるるるるる」

「獣人^{じゅうじん}にしては、人間くささがありすぎるぜ」

飛びかかってきた獣人を、青年は手の黒爪^{くくそう}で薙^なぎ払う。

「くきゅああああっ」

その爪は鋭く、長く伸びる。

「がおううう」

背後から襲い来る獣人を、青年はその爪で切り伏せた。

「あばよ」

それでもまだ息のある獣人の喉に、黒爪^{くくそう}を刺し込む青年。

ちゅうちよなく、その静脈を掻^かき切った。

「これは、改造された人間か？」

獣人の群れに囲まれた青年は、その数の多さにうんざりする。

ふと、獣人のひとりが階段を上っていく。

青年は包囲網を跳び越え、飛びかかる獣人を蹴散らし、階段へとひた走る。

「何か物音がしたぞお！」

「こつちだ。こつちで声が聞こえた」

白を基調とした制服の、魔道士の集団。

それを遠目で確認し、青年は階段を全力で駆け上がった。

「間に合ったぜ」

獣人は大剣に体当たりをしていた。

青年は背後から黒爪を突き刺し、その息の根を止める。

「どうやら、逃げ場はなさそうだな」

青年は大剣を引き抜き、それを背中に背負った。

下から響く無数の足音は。

「何者だ？ 名を名乗れ！」

「うっせえな。ちったあ静かにしろよ」

白の魔道士一団によるものだった。

彼らに杖やロッドを突きつけられても、青年は気後れすることは

なかった。

「く、貴様も、下で見た改造人間か？」

「違うな。よく見てみるよ。オレの耳は、普通だぜ」

「ぬ。た、確かに」

青年は髪をどかして、耳をさらす。

戦意がないことをアピールするために、青年は両腕を上げて部屋に入った。

「な、なんだ。ここは」

「監禁部屋らしい。んで、捕まってたのはあそこに寝てる」

「な、なんと」

白の魔道士は、ベッドに寝ている少女を見て絶句した。

「下手な真似はすんなよ。そうした時点で、オレはテメエらを敵と見なす」

「わ、我らに刃向かうというのか」

「ありやオレの主人だ。まだ名前すら聞いてねえ。ぐっすり寝てんだ。もうちつと休ませてくれや」

青年は腕を下ろし、少女の頬を優しく撫でた。

「ところで、まだ獣人やら鳥人はいるのか？」

「あ、ああ。そのようだ。下に倒れていたあれらは全て、お前がやったのか？」

「一部だけだ。オレが来る前には、共食いしてたようだが」

「そ、そうか」

白の魔道士は、階段のほうを見てハツとなる。

「どうした？ 何があったのじゃ」

おばあさんのような口調でしゃべる、ひとりの女の子。

女の子はその小さな手で魔道士達を押しつけて、部屋に入ってきた。

「こ、これは、すみません。ミイヴ様」

黒く大きなどんぐり眼に、艶のあるキレイな黒髪。青年より長くはないが、その光沢は青年が息を飲むほどだった。

この場にいる誰よりも背が低い。それをごまかすためか、とんがり帽子を被り、厚底のサンダルを履いている。それでも目の位置は最も低かった。

服装は黒のワンピースに、それと同色の外套を羽織っていた。その手には、青黒い輝きを放つ石がはめこまれたロッドが握られている。

「おや、見慣れぬ者がひとりおるな」

「ほう。白ずくめの一団の中に、黒を好む魔女がいるたあな」

「魔女、じゃと？」

眉をひそめる女の子。

「そう怒るな。オレも見ての通り、黒一色だ」

「ふむ」

女の子は腕を組んで、青年の顔を見上げた。

「ワシの名はミイヴ。ミイヴ・レーベじゃ。ミヴでよいぞ」

「礼儀のできたお子さんだ。オレの名はジェットってんだ」

「貴様、ワシを愚弄しておるのか？」

ミイヴと名乗った女の子は、溜息をついてからジェットと名乗った青年をにらんだ。

ロツドの先端を向けて、そこから黒い球体を発現はつげんさせている。

「へえ。若いのに、もう発現ができるたあな。相当な手練てだれだな、ア
ンタ」

「そういう貴様も、背中にまな板を背負っておるな。それにその顔、
見覚えがある」

「……………」

ミイヴの言葉を耳にして、ジェットは無言になる。

まばたきをせず、その鋭い目で魔道士の一团をにらんでいた。

「き、貴様。我らとやる気が」

「止める。ワシらが束になってかかっても、そのジェットとやらに
は敵かなわん」

「し、しかし」

「ベッドに虹の少女がいるのじゃ。ここで争うわけにもゆかん。そ
れにまだ外では、同士が敵とやりあつておる。ここにふたり残つて、
他はそちらの援護に向かえ」

「は」

幼い魔道士ふたりを残し、白の魔道士数人が階段を下りていった。

「ジェットよ。その少女を運べるか？」

「ああ。んで、オレと主人の安全は約束できるんだろつな」

左手で帽子を被り、それから少女を抱えるジェット。

「主人？ ほほう。その少女が、貴様を呼び出したのか」

「……………」

ミイヴはジェットが少女を抱き上げたのを見て、手振りで階段を
下りるよう促した。

階段を下り終えて、ジェット達は絶句する。

「こりゃあ」

「囲まれておるな」

ついさつき援護に向かわせた魔道士達は、すでに息絶えていた。

獣人だけでなく、鳥人が群れに加わっている。逃げ場はない。

「かなりの数じゃな。む？」

「数えるのが面倒だ。そこのお前」

「え？ あれは……」

ミイヴと魔道士の女の子は、何かを見て疑心を抱いた。

「おい、聞いてんのか？ 主人を頼む」

「ふえ？ あ、は、はい」

ジェットは魔道士の女の子に少女を預けて、その大剣の柄に手をやって前に出た。

「ひとつ忠告しておく。お前らは一步も動くな。細切れこま切れになんぞ

「ぬ？ ひとりで、やるというのか」

「何度も言わせるな。やんぞ」

ミイヴは男女の魔道士ふたりを手で制して、ロッドを構える。

「それでいい」

ジェットは大剣を突き立て、背中から黒い翼をふたつ出現させた。

「こ、これは」

「さあ、日の当たらないうちに 死ねや」

ジェットに飛びかかった獣人に鳥人は、翼より散らばった黒い羽根によりズタズタに引き裂かれる。

また、影から鋭く細い針が突出し、あたり一面が黒一色に染まっ
てゆく。

ミイヴと魔道士ふたりは、びっくりして硬直していた。

額から汗が落ちる。それは、自分自身の影から飛び出した針を湿
らせる。

「……………。ふん」

その翼がはたたく音がした時にはもう、影針かげばりは消え、羽根は床に
舞い散っていた。

「こ、これが」

ルナティーフス
「黒月鳥の力なんですな」

男女の魔道士が、そうつぶやいた。

「恐ろしいものじゃ。あれだけの敵を、一瞬で屠るとは」
「おい」

ジェットは翼一組で背後の三人を突き飛ばした。
「動くなど、言っただろう」

ジェットの右肩から、鮮血が飛び散る。

まだひとり、鳥人が潜んでいたのだ。

「な」

「え」

「く」

魔道士ふたりとミイヴは尻もちをつきながら、その手に握る武器を前に構えた。

「ファイア」！

「ウインド」！

「バインド」

ふたりは火と風の攻撃魔法を唱え、ミイヴだけは敵の動きを止める補助魔法を詠唱した。

「こんの、どあほうが」

ジェットは振り返りざまに、三人に迫ろうとした鳥人を黒爪で切り捨てた。

「無事か。ジェットやら」

「ったく、勝手に動きやがってよ。しかもそのふたり、どさくさに紛れてオレを攻撃したよなあ？」

「え、そんなつもりは」

「ご、ごめんなさい」

「そう怒らんでくれ。とっさのことで、メイとカロスとはパニックになっただけじゃ」

メイと呼ばれた女の子と、カロスと呼ばれた男の子は、ペコリと頭を下げた。

深緑の長い髪を、青いリボンで束ねた小柄な女の子。

短い赤の髪が逆立ち、首に赤いスカーフを巻いた、ここにいる中では二番目に背の高い男の子。

ふたりは顔を上げて、半目でにらむジェットに平謝りする。

「その割には、正確に詠唱できてた気がするんだよなあ」

「常日頃から、ワシらは発声練習しておるからのう」

膝について、右肩を手で押さえているジェット。

ミイヴは彼に近寄り、ケガの程度を確かめる。

「ちと傷が深いな」

「ミイヴ様」

「む？ メイ。今度はワシが少女を預かる番か。カロス。ワシだけでは……」

「あ、はい」

カロスはミイヴとともに、眠っている少女を支える。

「すみません。すぐに癒してあげますね」

「お、わりいな」

メイの回復魔法を受けて、ジェットは頬を緩める。

「済まぬのう。ジェットの言いつけを破り、動いてしもつて」

「いや、言葉が足らなかつた。いいつて言うまで動くなど、注意しときゃあよかつたんだ。さっきのはオレが悪い」

「む。そなたは、意外にも」

ミイヴが何か言いかけた時、抱えていた少女に反応があった。

「う、うう」

パチリと、その目が開かれる。

「ようやく、お目覚めか」

ジェットはメイの魔法を手で制して、まだ残っていた翼で後ろを叩く。

背後へ投擲された羽根は、新手の獣人を黒い毛玉にした。

「まだ油断するな。ここの濃厚な血の臭いで、獣人が集まってきている。さっさと離脱すんぞ」

「そうじゃな。長居は禁物じゃ。外に出て、本隊と合流したほうがよい」

メイとカロスの手足は、震えていた。

使えそうなのは、その黒いちびっ子だけか。

ジェットはそう見切りをつけて、目を覚ました少女の瞳をじっと見つめた。

髪だけじゃねえのか。眼球まで、遊色だとは。

「あ、あの」

「ご主人。お前はまだ休んでろ」

「あ、あなたは……」

「オレの名はジェット。自己紹介は後にしてくれ。まだ敵が潜んでやがる」

立ち上がるジェットを見上げて、少女は。

「わあああああああいつ」

「な」

その胸に飛び込んで、ぎゅっと彼に抱きついた。

「すりすりい」

「おい。人の話を聞いてんのか？」

その頭を手で押さえて引き離し、ジェットは少女を見下ろす。

「やつと、やつと呼べた。わたしの友だち」

「あん？」

聞き慣れない単語に、ジェットはいぶかしげな顔をした。

「だあいすきいつ」

「な」

突然の告白に、ジェットは頬を赤くした。

少女は瞳を潤ませながら、にこにここと微笑む。

上目使いに見つめられて、ジェットは目をそらした。

「あ、わたしはね。アイリスっていうの」

「アイリス、ね。解った。ご主人、とにかく今はおとなしくしてろ。いつ敵襲を受けるか解らない」

「むっ」

「なんだ？　なんで怒ってる」

「名前」

「あ？」

「なま〜えっ」

「それがどうした」

「ジェットって、いじわるっ？」

首を傾^{かし}げて言われ、ジェットはお口があんぐり。

「ちっ」

不覚にも可愛いと思ってしまったジェットは、ポケットから白のリボンを取り出す。

それで、アイリスと名乗った少女の髪を束ねてあげた。

「あ、ありがとう」

「逃げる時に邪魔だからな。ご主人、おとなしくしてるよ」

「むっ」

「だ、なんだよ？　早くここから脱したいんだ。何が不満だ。はっきり言いやがれっ」

「名前、呼んでくれないの？」

「な、名前だっつて？」

「ワシの名はミイヴと申す。ミヴでよいぞ。アイリス」

「あ、これはどうも。わたしはアイリスです。よろしくね、ミイヴ。

あ、ミヴでいいんだっけ？」

「うむ」

早速打ち解けている、ミイヴとアイリス。

そういうことじゃ。と言いたげな眼差しを、ミイヴはジェットに向ける。

「ち」

舌打ちをして、ジェットは。

「アイリス。それからメイにカロス。最後にミイヴ。オレが先陣を切る。正面と側面、上は任せてくれ。ただ、背後に関してはオレじ

やどつしよつもできない。お前らがいつからな。んで、それはミイ
ヴに一任する。んじゃ、今呼んだ順番で外まで走るぞ」

親指で行く先を示して、皆に背中を向けた。

「ジェット。な、なにかあったの？」

「説明は後だ。ここじゃ悠長に話もできねえ。アイリス。オレの右
手から手を放すなよ」

ジェットはアイリスの小さな手を優しく握る。

「意外にも、優男じゃな」

「黙ってる」

ほんの一瞬、ジェットは眉をひそめた。

「む。わたしの友だちに、そんなこと言っちゃダメっ」

アイリスがぎゅっと強く手を握り返した。

「悪かった。それより、皆が追いつける速度で走るから心配しなく
ていい」

大剣を拾い上げて、背負い直すジェット。

「わ。大きなまな板」

「な、なんだってえ？」

「ジェットって、お料理上手なんだね」

「はあ？」

こいつ、天然かあ？

アイリスと話していたジェットは、苦笑いしながら皆を一瞥する。
「んじゃ、もうそろそろ行くぞ」

「な、なんだ？ どういうことなんだ」

「迷うな。やらなくちゃ、こっちがやられるんだ！」

城内のロビーに辿り着いたジェット達。

そこで白の魔道士達が、獣人と鳥人と争っているのを目撃した。

「ね、ねえ。あ」

アイリスから手を放し、手すりの上に跳び乗るジェット。

「任せろ」

二階から一階へと飛び降り、ジェットは左手で背中の大剣を引き抜いた。

「オレの利き腕は、左なんでね」

落下と同時に、ジェットは鳥人をひとり串刺しにする。

その途中、黒い羽根を散らして、空を飛ぶ鳥人を全て撃ち落とすた。

「後は、地を這う獣だけだな」

魔道士達はジェットを敵と認識して、杖にロッドを突きつける。

「そやつは味方じゃ！ 皆の者、ここは外へ退散しろ。あまりにも敵の数が多すぎる」

ミイヴの声がして、魔道士達はその先端を獣人へと向けた。

「ジェット。どうして、どうして鳥さんを傷つけるの」

「アイリス。こいつらに言葉は通じない。説得を考えんな。殺害だけを念頭に置け」

階段を下りてくるアイリスを見やって、ジェットは大剣を後ろに振り被った。

「伏せる、お前らあ！」

声を張り上げて、ジェットはアイリスの頭上めがけて大剣を放り投げる。

「アイリス！」

「きゃっ」

ぼつつとしていたアイリスの頭をつかみ、強引に伏せさせるミイヴ。

ふたりの上を通過した大剣は、潜伏していた鳥人を串刺しにした。

「あ、危ないでしょっ！」

「そいつを生かしていたほうが危険だったぜ」

頬をふくらませるアイリス。肩をすくめるジェット。

左手で羽根帽子を深く被り、ジェットは高く跳んで、壁に足をつける。

「あらよつと」

大剣の柄をつかんで、力づくでそれを引き抜いた。

階段に着地したジェットは、アイリスとミイヴを見てこう告げる。

「ミイヴ。早くこいつらを連れて外に出ろ」

「なんじゃと？」

「奥のほうから大物が来ている。足音が聞こえないか？」

「た、確かに」

ズシンズシン。アイリス達がやってきた通路から、甲高い声がする。

「な」

「え」

メイとカロスの背後を、ひとつの火球が通り過ぎた。

それに驚いてふたりは階段を踏み外し、転げそうになる。

「火炎、じゃと？」

「あつぶねえな。角にぶつけてケガしたらどうすんだ」

ふたりの頭に手をやり、支えているジェット。

「ご、ごめんなさい」

「すみませんでした」

謝りながら、ふたりは階段を駆け下りていく。

「話している暇はない。さっさと行け。テメエらは足手まといだ」

「こら、ジェット！」

迎え撃とうと、大剣を引きずりながら二階の廊下に立つジェット。

アイリスは彼に詰め寄り、頬をふくらませて抗議する。

「どうして、そんなことを言うの？ めっ」

「な、なんだつて？」

上目使いに注意されて、ジェットは困惑する。

「ミイヴ様。外にいる敵はほとんど駆逐したそうです。残るは……」
下にいる魔道士がミイヴにそう伝える。

「城内だけ、か。ならば、ワシもここに残って迎撃しよう」

ふたりと肩を並べるミイヴ。

「二度は言わねえぞ」

「ふん。ワシらはそなたに何度も窮地きゆうちを救われたのじゃ。ここにそなただけを残して立ち去るなど、ワシの侠気きやくきに反する」
「ミイヴの手は、震えていた。」

ジェットはそれを見て、左手で帽子を深く被る。

「わ、わたしもがんばるよ」

「アイリス。アンタは下がってる」

「やだ」

「わがままを言うな。第一、アンタは戦えるのか？」

「え？ ん〜っと。ちょびっとだけ」

「そうか。なら出てけ」

「な〜ん〜でっ？」

「邪魔なだけだ」

「わたし、友だちが傷つくのはやだもん。そんなことする子は、ちやんと叱ってあげなくちゃね」

「果たして、相手が説得を聞き入れるかどうかは」

怪しいもんだぜ。

そう言うのを止めて、ジェットは前に出る。

大剣を斜めに構えて、左足で刀身を押さえながら火球を防いだ。

「密度が濃いな。それに、あの影は……」

ジェットだけは、暗い中でも目が利く。

通路の奥。耳から竜の翼が生えた人間が歩いてくる。

「竜人りゆうじん、だど？」

「ぬ。ジェット。今、竜と申したな」

「ああ」

「腑ふに落ちたぞ。そやつが火を吹く理由が、な」

「どうせ解ったんなら、相手の弱点にして欲しいぜ」

「それは、これからじゃ」

ウインクして微笑むミイヴ。

緊張がほぐれたと察したジェットは、大剣を背負い直して腰を落

とす。

「ジエツト。わ、わたしどうしたらいいのっ?」

「逃げる」

「やだ」

「だったら、自分ができることを言葉にしてくれ」

「えっと、魔法が使えるよ?」

「はあ。んで?」

「傷を治す魔法、とか?」

「だったら、外に出て傷ついているヤツを癒してこい」

「あ、うん」

アイリスはにっこりと微笑んで、階段を下りていった。

「あうっ」

が、途中で転んでしまった。

「だ、だいじょうぶ?」

「あ、はい」

階段で待機していたメイが、転んだアイリスを支えていた。

「あ、ありがとう」

「いえ。ジエツトさんに何度も助けられました。わたしも、できることをします」

ドンつと手で胸を叩いて、むせるメイ。

その隣にはカロスも立っついていて、彼もやる気満々だ。

「ジエツト。やっぱりわたしも残る」

「好きにしな」

「え? ええ?」

「ん?」

アイリスの頬が真っ赤になる。

それを見て小首を傾げながらも、ジエツトは姿を現した竜人に大剣で斬りかかった。

移動を封じても、向こうは くうつ！」

ミイヴはうつぶせて、竜人が吐いた火球をかわした。

その拍子にとんがり帽子が落ちるも、ミイヴは拾わずに立ち上がった。

「危ないと感じたら階段を下りて、一階から援護してくれ。オレら
が何とか押さえる。もし無理そうだと思ったら、アイリスを連れて
外に出ろ」

「は、はい」

「あ、ジエツト……」

「アイリスは下から回復魔法を唱えてくれ。それだけでも充分だ」
「う、うん」

メイはアイリスを連れて、一階へと下りた。

「カロス君。カロス君も、危ないから」

「ぼくだって、やれるんだ。“フレイム”！」

カロスがロッドから放った火の玉は、竜人へと一直線で飛んでい
く。

それを目にした竜人は、歓喜の表情で火球を飲み込んだ。

「なに？」

「なんと」

「そ、そんな」

ジエツトとミイヴは目を白黒とさせて、カロスは息を飲む。

火を頬張った竜人は舌なめずりして、口から黒い煙を吐いた。

「フツヘエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエツツ」

「な、体液が……燃えているだと」

竜人は舌を出して、口から大量のよだれを垂らしている。

その液体は、石に触れたことで炎に変化した。

「ぼ、ぼくが……」

「カロス。ぼつつとするでない！」

竜人が手から伸びた爪を石の床に突き刺して、勢いよく振り上げ
た。

それは赤く発光した石と、足下の炎を増幅させて地面を走らせる。
「任せろ！」

ジェットが大剣で石を打ち払い、ミイヴは青黒い石のロッドをかざして、その炎の軌道をそらした。

「あ、ミイヴ様……」

「ガキが。死にたいんだつたら、後にしやがれ」

ジェットは右肩を手で押さえて息を荒げている。

傷口が、開いたらしい。

「澄み渡る水のように、この想いに曇りなどありはしない。願いはひとつ。常より離れた非を嫌い、今ある姿を常へと戻せ。“リカバ

ー”

下から鈴のような、心地のよい歌声が聞こえた。

それは、アイリスの回復魔法だった。

「す、すごい」

その癒しの光に包まれた皆は、みるみるうちに元気を取り戻した。彼女の隣にいるメイは、その効果と範囲の広さに感嘆かんたんとしている。

「だ、だいじょうぶ？ ジェット」

「こいつあ、ありがてえ。右肩の傷が、ほとんど塞がってら」

「そう。よかった」

にっこりと微笑むアイリス。

それを見て、ジェットは親指を立てた。

「これなら、両手で大剣を振るえるぜ」

「“バインド”」

呪文を口ずさんでいたミイヴが、横から魔法を挟はんだ。

「グアアアアオオウウウウウッ！」

「む？ これは」

が、竜人はその魔法を受けても、ゆっくりと前進していた。

「どういうこった？ ミイヴ。お前」

「違う。あやつが、拘束を破るほどの力で歩いておるのじゃ」

ジェットは疑いの眼差しをミイヴに向ける。

それを横目に、ミイヴはロッドを両手で握り締めた。

「となると、まずいな。その魔法がなけりゃ、あいつのバカパワーとまともにやりあわなくちゃならねえんか」

「やらせんよ。“シエイド”」

呪文を省略して、ミイヴは竜人の影から針を出現させる魔法を唱えた。

足下から飛び出す影針に、全身を貫かれる竜人。

「ひゅ〜 やるねえ」

しかし、竜人は平然とした顔で歩いていた。

「な、なんだ？ あいつ、痛覚がないのか」

「解らん。呪文を省いたから威力が低いのは確かじゃ。それでもダメージがないわけでは……と、とにかく。今は、下へ逃げたほうがよさそうじゃぞ」

ミイヴの指示で、先にカロスが階段を下りる。

「ジェット。お前は」

「オレは階段を使わない。ミイヴ、アイリスを連れて外に出ろ」

「ん？ どうしてじゃ」

「あいつの口を見てみな」

「な、なるほど」

ミイヴは手すりを跳び越えて、一階へと降り立つ。

「随分と身軽だな。って、浮けるのかよ」

「その通りじゃ」

ミイヴはロッドの力でふわふわと浮遊し、皆に出口へ走るよう促した。

開いていた門から、メイとカロスとアイリスが飛び出す。

「ジェット」

「ミイヴ。テメエも先に行け！ でっかいのが来るぞ」

「相解った」

ミイヴが外に出たのを視認した後。

ジェットは床に大剣を突き刺し、その柄を両手で握り締めた。

分厚い石の壁をぶち破り、竜人は。

大声で怒鳴り散らしながら、アイリス達のいる庭園へと降り立った。

「なぬ？」

ミイヴだけでなく皆は、竜人の左腕がないことに気がついた。

「どういうことじゃ？」

「とりゃああああああああああっ！」

竜人が作った風穴から飛び出すジェット。

大剣を下に構えて、落下の勢いに任せて竜人を串刺しにしようとする。

「なっ」

しかし、まだ残っていた炎の渦に驚き、背中に出現させた翼で羽ばたき、高度を上げた。

「ちい」

ジェットは庭園の石垣に着地し、翼を消して竜人とにらみ合う。

「あ、しまった」

「す、すいません」

「謝ってんじゃねえ！ 左腕はどうにか斬り落としたが、その途端にアレだ。より頑丈になってっから気いつける」

ジェットの発言で皆は、竜人の身体が藍色の鱗に覆われていると気づいた。

「フリーズ」

「ライトニング」

外で待機していた魔道士達が、竜人めがけて一斉に魔法を唱える。氷のつぶて、稲妻。どれも竜人には命中するが、効果が薄い。

「フツヒアアアアアアアアアアッ」

口から黒い煙を吐き出して、石垣の上に立つジェットを凝視する竜人。

他の者には、目もくれない。

「ち。オレがおとりになる。残っている連中は、片っ端から魔法をぶつけてくれ」

石垣から飛び降り、ジェットは誰もいない城のほうへ走る。

「フツガアアアアアアッ」

怒り狂う竜人は、ジェットめがけて火球を放つ。

「な」

それは頭上を過ぎるも、ジェットの立っていた石垣を貫通した。

「又ゲアアアアッ！」

続けざまに竜人は爪で地面をえぐり、土塊つちくれを投げつける。

「こ、こいつめ」

それをかわしたジェットは、赤く発光した石壁せきへきを見て、腹を決めた。

「ジェット」

「アイリス。お前はこっちに来るなよ。いいか、絶対だぞ！」

「う、うん」

震えながら、アイリスはミイヴの手をぎゅっと握った。

「この庭園には……」

ミイヴは周りにあるものを観察する。

中央には石造りの噴水。まだわずかに水は出ている。

石垣近くには枯れた花ばかりの花壇かたん。

少し前に雨が降ったからか、地面が泥っぽくなっていた。

「曇っておるのか」

空を見上げて、ミイヴは左手に握るロッドを頭上かかに掲げた。

「レイン」

ミイヴが呪文を口ずさむより先に、何者かが雨を降らす魔法を詠唱した。

「ぬ。お前は……」

後ろを見やり、ミイヴ達はほっと胸を撫で下ろした。

「何事かと思えば、竜と人間の合成人間が暴れているなんて、ね」
深緑の外套をなびかせた少年が、石垣の上に立っていた。

「ケガをしている者は、僕の足下にある石門を潜って坂道を下り、海岸へ離脱なさい。そこに医療班が待機しています。それから、船はいつでも出せるように手配しておきました。無理はせずに、生き残ることを第一に考えなさい」

少年は上から指示を出し、この場にいた魔道士を退避させる。

長袖の白いシャツに、デニムの短パン、首に巻いた緑のスカーフ。年相応の服装をした少年は。

暴れている竜人を見て、溜息をついた。

「シリス。来るのが遅いぞ」

「すみません。けど遅れた分は、きっちり働きますよ。我が愛しの
ミヴ」

「ぬ」

シリスと呼ばれた少年はミイヴへウインクをする。

黒曜石のロッドを上空へ放り投げ、シリスは下へと両手を広げた。

「死したる者よ、その無念を我へと委ねん。さすれば汝らの想いは
黒き刃となり、復讐ふくしゅうのために研ぎ澄まされよう。『ダーク・リチュアル暗黒の儀式』」

その呼びかけは、庭園と城内から黒い輝きを集めた。

妖しい光を手元を集めて練り込むシリスを見て、ミイヴは憤慨ふんがいする。

「な、シリス。貴様あつ！」

「つべこべ言っている暇はない。ミヴ、早く彼の援護を。かなり危
ういみたいだ」

「ぬう。『バインド』」

ミイヴはジェットのほうを振り返り、拘束する魔法を唱えた。

「フツファイアアアアアツ」

「助かったぜ」

竜人に追い回されていたジェットは、この隙に噴水のほうへ逃れた。

「グツヒエエエエエエエエエエツツ!?」

その刃は竜人の腹を刺し貫き、石垣に張りつけにする。

「身動きできねえようだ。今のうちにたたみかける!」

ジェットのかげ声に最初に応えたのは、ミイヴだった。

「この想いは無駄にはせんぞ。『深淵の脈動』^{ダイク・フレア}」

無音の黒い爆発。

ミイヴがロッドを構えて唱えた魔法は、シリスと同じく禁術だった。

「黒髪のがキんちよふたりは、そんな危ねえもんを使えんのかよ。

おっっそしいねえ」

冷や汗を袖でぬぐいながら、ジェットはミイヴとシリスを注視する。

石垣は消し飛び、大剣は噴水近くに突き刺さった。

「ガ、グ、フゴオオオツ」

その竜人は全身から血を流して、膝をついている。

音のない黒の爆発は、竜人の鱗のほとんどを引き剥が^はしていた。

「もうちつとでくたばりそうだな」

噴水まで走り、大剣を引き抜くジェット。

振り返って斬りかかろうと走ったが、その足は止まった。

「いや、まだだ」

ジェットはある一点に目を見張った。

「何を言っておる? ジェット」

「よく見てみる! あいつのケツから、尻尾が生えてんぞ」

竜人の尻から、細長い藍色の尻尾が現れた。

白い皮膚から新たに再生しているのは、竜鱗。手足からは爪が伸び、口にある歯が鋭い牙に変化する。

その目は、その顔は、人間らしさを残していない。完全な竜と化している。

「全身が、鱗に覆われたか。シリス、この島から退散したほうがよさそつじゃぞ」

「かといって、まだ生存者がいるかもしれない。僕らがねばらないと、城内にいる魔道士が……」

「まだ中に誰かおるのか？」

「正確に数えてないから、どうにも」

ひとり、悔しさで泣いている魔道士がいた。

「ぼくは、ぼくは……」

カロスだ。

ロッドを強く握り締めて、彼は意を決して呪文を唱える。

「む？ カロス。何をやる気じゃ」

「ぼくだって、ぼくだって皆の役に立てます。見ててください」

ミイヴはカロスの前に立ち、彼を説得する。

「止める。あやつに火を放つても、活性化させるだけじゃ」

「じゃあ、ぼくは何もしないで見てろって言うんですか」

「その通りだ。カロス」

「っ」

シリスは冷たく言い放つて、カロスの呪文を中断させた。

「火の属性を弱めるために雨を降らせたんだ。今の君では、足手ま

といになるだけ。早々に退いてくれ」

「そ、そんな……」

カロスは悔しさに歯噛みして、後ろのメイとアイリスを見やった。

「冷たき雨は誰かの涙。その悲哀をぬぐい去るべく……」

メイとアイリスは背中を合わせ、両手を自身の胸に重ねて、祈りながら歌っている。

ふたりの長い髪を束ねていたリボンがほどけた。

髪が、スカートが、風でなびく。

カロスは、風すら嫉妬しっとするふたりに見とれていた。

「我が歌よ、天へと届け。優しく吹く風よ、その涙を暖めて。」

安らぎの風ヒール・ワインド」

メイとアイリスは同時に一歩踏み出し、両腕を広げ、曇天どんてんへと語りかける。

その祈りは風を呼び起こし、黒い羽根を巻き上げ、枯れた花を蘇よみがえらせ、雨粒を撫でながら、優しく皆を抱き締めた。

ふたりの想いは癒しの光をまとい、暖かい風となりて、この戦場を駆け抜けてゆく。

「っ」

ロッドを握り締めて、カロスが海岸へと走り出した。

「か、カロス君」

「メイ。君も船へと逃げ。僕らはいいつをどうにか足止めする。今すぐに船を出せと伝えてくれないか」

シリスの言葉に、メイは動揺する。

「え。でも」

「いいからっ。このままじゃジリ貧だ。まだ城内で生きている魔道士がいるかもしれないが、僕らの戦力ではねばれても数分が限界。それまでに生存者が確認できなければ、僕らはこの島を離脱する」

「そ、それは……」

「早く伝えてくれ。このままじゃ、全滅してしまう」
事態が深刻だと知り、メイは海岸へと走り出した。

「よし」

メイがいなくなったのを確認し、シリスは安堵の溜息をつく。

「あ、あの」

「ん？ おや、素敵なお嬢さん。あなたも船へどうぞ」
笑顔でアイリスの前に降り立つシリス。

その手を取ってエスコートしようとする。

「さあ、僕と一緒に走りますよ」

「あ、その。ミヴにジェットが……」

「さっさと行けえ！」

ジェットの声にシリスはうなづいて、アイリスと石門のほうで待機する。

「ミイヴ。お前もさっさと行くんだ」

「し、しかし」

「おい、ガキ。テメエは逃げたんじゃねえのか」

「そ、そんなことより……早く、とどめを」

ジエツトはカロスの覚悟を無駄にしまいと、大剣を振り被って跳び上がる。

「こんの、くそつたれがああああああああつっ！」

大剣に胸を串刺しにされて、竜人は吐血して動かなくなった。

「はあ、はあ」

ジエツトは竜人から大剣を引き抜いて、その遺体を蹴って遠くへ転がす。

「お、おい。そいつあ……」

カロスは、虫の息だった。

「い、生きて。ねえ、諦めないで」

涙目で駆け寄ったアイリスは、カロスに癒しの光を当て続けた。

「ぼ、ぼくは……もう」

「く。シリス。早く医療班に事態を伝えんかあ！」

「そ、そうだね。ミヴはカロスを船まで運んでくれ。僕は先に」

ミイヴは青黒い石がはめこまれたロッドをかざし、カロスの身体を持ち上げた。

シリスは石門を潜り、海岸に停泊する船へと向かう。

「自分以外も、浮かせられるのか」

「ジエツト。わたし、わたし……」

「アイリス。そいつを癒せ。まだ助かる可能性がある」

「う、うん」

「オレは歩いて船へ向かう。さすがに、熱さで体力が」

カサツ。草むらのほうで、物音がした。

「な。ふたりとも、走れえ！」

「え？」

「なに？」

アイリスとミィヴは、ジェットの羽根帽子が吹っ飛んだのを目視する。

「きゃっ」

その帽子は、アイリスの頭にすっぽりと収まった。

「ま、まだ息があるのか？ あいつあ、不死身かよっ」

大剣で火球を防いだジェットは、後ろにいるふたりに手振りで急げと伝える。

「飛んで追いつくから、早く船を出せえっ！ オレは安全圏に船が離脱するまで、こいつを押さえてやつから」

「でも、でも、ジェットが」

「オレはそいつみたいなへマはしねえ！ それよりさっさと治療してやれ。死ぬ確率が上がんぞ。ちきしょおがああっ！」

ふたりがカロスを連れて去ったのを確認し、ジェットは溜息をつく。

「グガアアアアアアア。ギュノオオオオオオオッ」

「けっ。テメエなのと、遊ぶのはもう飽きたぜ。こいつで屠ってやんよ」

重傷者の搬送を終えて、二隻の船はいかりを上げて進み始めた。

甲板には多くの重傷者が横にされ、処置を受けている。

「まだ、まだジェットが」

「アイリス。カロスの容態が危ないのじゃ。手伝ってたもれ」

「う、うん」

アイリスは両手をかざして、淡い輝きでカロスを癒す。

その隣に座るメイは、瀕死のカロスを前にして泣きじゃくっている。

「メイ。今ここで君が泣いても彼の苦しみは和らがない。それが嫌なら、全力を尽くせ」

「ひゃ、ふぁい」

つかんだ。

「させつかよ！」

「フグオオオツ」

地面へと叩きつけて、その腹を蹴飛ばす。

噴水に激突した竜人は、水を浴びて狂乱する。

「キツチャアアアアアアアアアアアアアアアアアッ」

「弱点は、やつぱ水か」

不意に、竜人の全身が炎に包まれた。

「な、なんだありゃ」

ジェットは竜人の体液が燃えているのを思い出した。

血が、ドロドロの血が、激しく燃焼している。

それは近くの草花を焦がしてゆく。

しかし、雨と水を浴びたせいなのか、その炎には勢いが無い。

「炎鎧えんがいがあつちやあ、オレでもきついな」

その熱気に当てられて、ジェットは額に汗をかく。

大剣の柄に手をやりながら、後ずさりする。

「クグルグアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

怒り狂う竜人は、目から血を流しながら泣き叫んだ。

「血の涙かよ。お前は、いったい誰なんさ」

「はやく」

「あん？」

「わ、わたしを……ころせ」

竜人の口から理性的な言葉が出てきて、ジェットは耳を疑った。

「お望みとありゃあ、今すぐにブツ殺してやんよ」

目の前に大剣を突き刺し、ジェットはその柄を両手で握り締めた。

第2話

船の甲板。

そこは、悲鳴が飛び交っていた。

「やだああああああああっ」

「ど、どうして……」

医療班の尽力も空しく。

処置を受けていた重体者が、次々と息を引き取ってゆく。

「か、カロス……くん」

指先から癒しの光を紡いでいたメイは、亡くなったカロスの胸でむせび泣いた。

「もう、もういい。アイリス」

「え、でも……」

首を左右に振りながら、シリスはアイリスを止める。

カロスへ放っていた回復魔法を中断し、アイリスは悔しさに唇を噛み締めた。

「もうカロスには意味がない。まだ助かる見込みのある人に、その力を使って欲しい」

「う、うん」

シリスの指示で、アイリスはミイヴに連れられて他の重傷者の下へと向かう。

「……メイ」

「う、うううう」

「済まない。僕が、僕がまだ未熟だったばかりに……」
その慰めを受けて、メイは顔を上げた。

「そう、そうですよっ！ 全部、全部あなたが……」
メイはシリスのシャツの襟をつかんで、体重をかけて押し倒した。

「あなたが……」

メイが言いかけた時、近くに何者かが降り立つ。

「よう。お楽しみの最中かい？」

メイとシリスは、それが誰なのかすぐに解った。

「待たせたな」

ジェットだ。彼は右手で頭を押さえて、亡くなったカロスを見下ろす。

「こいつぁ、死んじまったのか」

笑いながら言うジェット。

それが信じられなくて、メイは彼に食ってかかった。

「どうして、どうして……カロス君を、バカにできるんですかあつ！？」

「あ？ そいつぁ、弱いから死んだんだ。あの時、おとなしく逃げていりゃあ死ぬことはなかったんだぜ？ 生きるのを止めると選んだのは、こいつの意思じゃねえか」

「ふ、ふざけないでください」

メイはジェットの頬に平手打ちを しようとしたが、身長差で届かない。

代わりにその腹を、ふたつの拳で殴った。

「っ」

「あなたは、あなたが、あなたが……カロス君を殺したんだ！」

「勝手に、オレのせいにするな……」

冷や汗交じりで反論するジェット。

「あなたが、不吉の象徴であるあなたがいたから、カロス君は……」

「全部オレのせいかな？ テメエの力量不足も含まれてねえのは、少し虫がよすぎるぜ」

「うるさいうるさいうるさいっ！」

涙をこぼしながら、メイはジェットの腹を殴り続けた。

「アイリスも……」

「あ？」

「あの場にあなたとアイリスという、不吉の象徴がふたりもいたか

ら。カロス君は、カロス君は死んじゃったんだ！ どうして、どうしてくれるの？ 責任を取ってよおっ！」

「そのガキが死んだ責任をオレらに押しつけんな。テメエは自分の責任から目を背けて、他人のせいにして楽しんでるだけさ」

「ち、違っもん！」

「だったら、テメエがやるべきことあ解ってるはずだ。こいつが死んだのは、テメエが弱かったからだ。そいつの冥福を祈って、もう二度とこんな惨劇は繰り返さないと誓い、強くなるべく、自分を磨き上げるしかねえんだよ！ んなことあ、テメエが一番よく解ってるはずだぞ」

「そ、んなこと……」

「解ってるってか？ ならいい。いちいちムカつくことを言わせんじゃねえよ」

右手で頭をかいて、ジェットは遠くで重傷者を処置しているミイヴとアイリスを見やった。

「っ」

メイは、泣きながら船内へと走り去る。

「ったく、無駄に説教させやがって。これだからガキはきれえなんだ」

処置を終えたアイリスがジェットに寄り添う。

アイリスは背伸びをしながら、被っていた帽子を差し出した。

「どした？ ご主人」

「む」

「わったよ。アイリス。どうしたんだ」

右手で羽根帽子を受け取り、それを被って潮風の吹くほうを見やるジェット。

頬をふくらませていたアイリスは、ジェットの右脇腹に癒しの光を与える。

「お。わりいな」

「うっん。ジェットは、わたしを助けてくれたもん。あ、ありがとう」

「いいんだよ。別に」

頬を染めるアイリス。

ジェットの顔を見るのが照れくさいようだ。

「あのさ、メイのことなんだけど」

「それがどうした」

「なんて、言ってたの」

「大したことじゃあない」

「そう、かな。メイ、泣いてたけど」

ジェットとアイリスの会話に、割り込むのがひとり。

「だいじょうぶですよ。ジェットはメイを励ましていたんです。彼女は強い子ですから。きつと、きつとだいじょうぶです」

シリスだった。

おもむろに立ち上がって、パンパンと服を叩いている。

「お前が言うでないぞ。メイはワシらのひとつ上ではないか」

「ミヴ。そういう君も、ね」

「ふん」

ミイヴも甲板の中央にやってきた。

シリスに注意した後、ミイヴはジェットを見上げる。

「やれやれ、自己紹介が遅れたな。改めて、オレの名はジェットだ」

ふと、アイリスがジェットから離れて首を傾げた。

「ど、どうした？ アイリス」

右手で帽子を外してあいさつするジェットを見て、アイリスは。

「ジェット。左腕をケガしてるの？」

「……っ」

「あ、やっぱり」

様子がおかしいと気づき、ジェットの左腕を癒しの光で包んだ。

「だ、だいじょうぶだ。もう脇腹はやってもらったんだ。無理すん

なつての」

「無理してるのはジエットのほうっ」

「だ、な、なんでオレの左腕がケガしてると思うんだよ。平気だったってんだろ」

「だって、ジエットは左手で帽子を触ることが多かったもん。でも今は、それができないんでしょ？」

その指摘に面食らうジエット。

驚きのあまり、アイリスから身を離れた。

「それに、後ろのまな板の角度が変だよ。棒が右肩から出てる。ここに来る前は、左肩から棒が出てたじゃない」

ミイヴとシリスは、アイリスの洞察力に舌を巻いた。

「ちっ。わくったよ。ほら」

屈みながらシャツの袖をまくって、ジエットは左腕をさらした。

「ひどい」

「ただのアザだ。あの竜人の頭を大剣で力手割る時に、抵抗されちまってる」

頬を指でかきながら、そう説明するジエット。

「あの竜人を、倒したのですか？」

「ああ。向こうは隻腕だ。右手の爪と口から吐く炎に気をつけてさえいれば、どうってこたあない」

曇り空を見上げながら、ジエットは得意げに語る。

ふと、アイリスは「ん？」と小首を傾げた。

「ジエット。それ、ウソでしょ」

「な、なにっ？ ど、どうしてそうなる」

「だって、上見で言ってたもん。それって、男の人がウソをつく時にする仕草でしょ？」

「ちょ、ちよつと待て。何を根拠に言ってるんだ、その屁理屈は」

「へ、部屋で読んでた本に書いてあったよ」

「ほ、本だと？ そ、そんな不確かなもんで、オレの発言をウソだと決めつけんのかよ」

「う、だ、だつて……」

頬を朱に染めて、アイリスはそっぽ向いた。

唇をとがらせ、横目でジェットの表情を確かめている。

「痴話喧嘩ちわけんかはそこまでにして。初めまして、僕の名はシリス・ラデアート。この船と後ろにあるもう一隻の船の監督を任されており
ます」

「要するに、両方の船にいる魔道士らのリーダーってわけか」

「その通りです」

礼儀正しく頭を下げるシリス。

「んで、ワシは副リーダーのミイヴ・レーベじゃ」

「ちなみに僕の嫁さんです」

「違つっ！」

シリスの妄言もうげんに、すかさず突っ込みを入れるミイヴ。

「ごっほんとか払いし、ミイヴは手振りでアイリスの発言を促した。

「あ、わたしはアイリス・レインボウイチと申します」

皆はペコリと頭を下げる。

「なるへそ。テメエらガキんちよが団体を束ねてただと？ どうり

で、作戦にムラがあると思つたんだ」

ジェットの指摘に、無言になるミイヴとシリス。

ふたりはこの結果に、責任を感じていた。

「こら、ジェット。めっ」

「な、なんだよ」

「ふたりを困らせちゃダメっ」

アイリスが頬をふくらませたのを見て、吹き出すジェット。

「こらっ。叱ってるのに笑うなんて、めっ」

「わ、解つたよ。悪かった」

ジェットが謝ると、ミイヴもシリスも左右に首を振る。

「確かに、ご指摘の通りです。僕らも作戦を練るに練ったのですが、敵の戦力を見誤った」

「そつだな。お前ら魔道士だけで戦場におもむくのは自殺行為に等

しい。どうして前衛を任せられる戦士を用意しなかった？」

シリスの発言に、疑問を投げかけるジェット。

次に答えたのは、ミイヴだった。

「しなかったのではない。できなかったのじゃよ」

「できなかった？ ミイヴ、そいつぁどうしてだ」

答えずに腕を組むミイヴ。

「ふん。他の連中を見ていると、大体の察しはつく。お前ら、ヨラシドナの王立魔導院に属している魔道士なんだろう？」

「よく、ご存じですね」

シリスはジェットの知識に、うなづいて感心している。

「知ってるも何も、テメエらの組織の一員が、ギルドの首取りと一緒に行動してるのをよく見かけてんだよ」

「なるほど。それで知っているのですね」

「嫌みにしか聞こえねえな」

シリスは聞いても話さないと感じたジェットは、次にミイヴを見る。

無言で目をそらしたので、こいつもダメだと諦めた。

「はい。もうだいたいじよぶだと思っよ」

左腕の処置を終え、アイリスが離れる。

ジェットは手で触ってみて、痛みがないことを確かめた。

「とんでもない魔力だな。アイリス、お前はどっやって回復魔法を学んだんだ。あ、やっぱ本か」

「う、うん」

「本でこれだけの力を制御できるのは妙だな。誰か、師でもいたのか」

「し？」

「師匠。先生のことだ」

「あ、うん。ゼネフおじいちゃんが、わたしに魔法を覚えてくれたの」

満面の笑みで語るアイリス。

三人は口を結んで、彼女の話聞いた。

「一ヶ月前にいなくなっちゃったんだけどね。わたしにカレー井の作り方とか、言葉や字の読み方を教えてくれたんだよ」

「いなくなった？ そりゃあ、死んじゃったって意味か」

「ちらりとカロスの遺体を見て、ジェットがアイリスに質問する。

「う、うん。そうだって聞かされてる」

しゅんとなるアイリス。

「誰からだ？」

「お、おばあさんから」

「あの城には、老人しかいなかったのかよ？」

「え。わたし以外にも、ちょっと年上の男の人や女の人がいたけど

……」

それを聞いて、ジェットは何か思い出した。

アイリスの髪を軽く撫でて、ジェットは「無粋なことを聞いた。

ごめん」と謝る。

「ううん。別に……いいよ」

恥ずかしくなり、うつむくアイリス。

「そういや、あの島で見た獣人や鳥人、最後の竜人もそうだがよ。

ほとんどが……若いヤツばかりだったな」

その場にあぐらをかいて、考え込むジェット。

左手で帽子を押さえながら、城での出来事を思い返している。

「言われてみれば、そのような気がするのう」

「僕のほうはそれほど数を見てないので、どうにも判断できませんが……」

ジェットは左手を膝の上に置き、こう切り出した。

「島を飛び立つ時から怪しいと思ってたんだ。あんな孤島に、堂々と目立つ城が建っていることがおかしいんだよ」

「何が、おかしいの？」

顔を上げて、小首を傾げるアイリス。

足場が揺れることに慣れてないのか、アイリスは転びそうになる。

「座つとけ。そのほうがいい」

「あ、うん。ありがと」

ジェットに手を引かれて、アイリスは彼の左隣に腰を下ろした。

「それで、その続きは？」

「うむ。気になるな」

シリスとミイヴがその先を促す。

「テメエらも大体は解つてんだろ？ あの城で行われていたのは人体実験。だったら城なんか建造せず、ひっそりと地下でやりやあいんだ。バレルの可能性が低くなるからな。でもあの城にいた連中はそうしなかった。なぜか？ 簡単なこつた。老いてるのばつかだから、長旅と肉体労働にや向いてねえんだ。外でぼつくり逝つて、証拠を残しちまうわけにもいかねえ。そのリスクを回避して、かつ楽して集める方法があつたのさ。どっかで一山当てたいと考えている馬鹿を誘い出すには、ああやつて意味深で目立つものを置いとくときゃいい。そうすりゃあるはずのない財宝目当てに、外から来たモルモットが勝手に罠にかかつてくれんだ。楽なもんだぜ。ただ、あの島の存在が広まらないように、外部で糸を引いてるヤツもいねえとおかしい」

話し終えたジェットは腕を組んで、まだ何か考えている。

「確かに、そうですね。けど、もうひとつおかしい点がありますよ」

「なんだあ？」

「はい。あの島の資源だけで、石の城なんて建つてしょうか？」

シリスの意見に、ジェットもミイヴもうなづいた。

「まあ、当然ながら建つわきゃねえな。どっかから調達するしかねえ」

「それもそうですが、城を造る技術者も必要ですよ。運搬費と建造費^{うひ}だけでなく、研究費や食費、あらゆるコストが莫大^{ばくだい}です」

「だから、裏で糸を引いてるヤツが外にいんだよ。そいつが資金源の**はずだ**」

「なるほど。どこかに黒幕がいる、というのは僕も納得できますね」

「だろ？」

ジェットとシリスの会話に、ミイヴが割り込んだ。

「現にワシらも、地図をもらって半信半疑である島へ向かったんじや。あれだけ目立つものを隠すなど、かなりの権力者でなければ…
…情報統制などできぬぞ」

腕を組んで、シリスをにらむミイヴ。

「な、なんだい？」

「そもそも、この作戦を立案したのはシリスの師であるレイエル副院長じゃろう？ その言いだしっぺがおもむかず、地図を渡してワシらだけでこの島に船で行けなど、腑に落ちん。我が師であるトルミ工院長も、この作戦についてとやかく言わなかった。ワシは魔法戦士および剣士では前衛の数が足りないから、ギルドに協力をあおげとゆうのに、ばあ様に却下された。いろいろと不審な点が多いな」
「……………」

ミイヴの発言を、無言で聞いているシリス。

ジェットは立ち上がった話題を変えた。

「ちいとわりいが、腹が減ったな。飯を食わしてくれないか」

「む？ 突然、何を言い出す」

「言葉通りだ。戦った後で考えたせいか、腹の虫が騒いじまったよ。オレあ、考えるのは苦手なんさ」

腹を押さえているジェットを見て、ミイヴは納得した。

「ふふつ。ま、よかるう」

「笑うな。クソガキ」

「へっくち」

アイリスがくしゃみをした。

ミイヴとの話を切り上げ、ジェットはポケットから黒の外套を取り出し、彼女にかけてあげた。

「あ、ありがと」

「オレの羽毛で編んだやつだから、保温性はあるぞ」

「あ、ほんとだ。もこもこしてる」

それに包まって、ご機嫌なアイリス。

頬を緩ませて、ジェット顔を上目使いに見つめている。

「本当に優男やさしいおとこじゃな」

「黙ってる」

ミイヴの指摘とアイリスの目線に、そっぽ向くジェット。

「ふくむ。困りましたね」

「あ？ 何が困ったんだ」

シリスは顎に手をやり、ジェットのほうを向いて、事情を説明する。

「いえ、その。調理担当の魔道士が、ケガをしたり休んでいるので、すぐには食事の支度はできないんですよ。もう夕食を食べ終わっている時間帯ですけど、作戦が長引いたのもありまして……」

「ちつ。朝まで待ってっのか？」

「それに皆は、食事どころではないと思いますし……」

シリスは周りを見回して、神妙な面持ちで言う。

「人が死んでんのを見て、食欲がないのは解るさ。けどな、オレらは生きてるんだ。飯をちゃんと食わねえと、いつか倒れちまう。落ち込んでてもしょうがねえのよ」

「そう、ですね。向こうの船の様子も見たいですし、嵐も起こりそうですしね。近くの島に停泊して、休息を取りましょう。いいですね？ ミヴ」

「構わん。しかし、誰が何を作るのじゃ？ 大人数の腹を満たすものなど……」

ふと、誰かが拳手こぶしをした。

「あ、わたしがお料理しますっ」

アイリスが、にこにこ笑顔で立候補した。

近くの小島で停泊し、甲板でカレーを調理中。

「ふんふん」

白の割ぼう着姿のアイリスは、鼻歌を口ずさみながら、大きな鍋の中身をおたまでかき回す。

野菜と肉を炒めているのだ。

「ありがとね。ジェット」

「どういたしまして」

大きなタルを持ち上げ、中にある水を鍋に注ぎ入れるジェット。不満気にあぐらをかいて、アイリスの調理を観察している。

というのも、黒羽の大剣をまな板代わりにされたため、ジェットは機嫌が悪いのだ。

「もうすぐできるからね」

「こっちももうちつとできあがんど」

ジェットは竹筒を手にして息を吹き、大きな釜でご飯を炊いている。

「後はスパイスを……」

「もうそろそろ、蒸らして待つだけだな」

そして、できあがったのは。

「できたあ」

カレーライスだった。

具は、タマネギ、ニンジン、ジャガイモ、肉はチキンである。

「これは、いい香りですね」

「うむ。皆も食欲を刺激されて、集まってきとるぞ」

「そのふたり、だべってないで食器とスプーン、人数分確保してくれ。それから配膳の手伝いも頼む」

シリスとミイヴを見兼ねて、ジェットが注意する。

「はい。解りました」

「ふむ。任せておけ」

ふたりは手で胸を叩き、自信満々にうなづいた。

それからアイリス、ジェット、ミイヴ、シリスは給食当番として奮闘する。

「うし。ちゃんと並べよ」

カレーのかぐわしい匂いに誘われて、大勢の魔道士が集まってきた。

中には人手不足だろうと心配して、給食当番を手伝う者もいる。調理担当の魔道士だ。

「ではでは、順番に並んでくださいね」

ミイヴとシリス、調理担当の魔道士が食器を届けてくれた。

ジェットがご飯で、次にアイリスがカレーをよそる。

ほぼ全員分が行き渡ったので、アイリスは白のエプロンを外した。きよるきよると、誰かを探している。

「どうした。アイリス」

「うん。メイの姿が、見えないなと思って」

「そっか」

ジェットはおもむろに立ち上がって、ちらっと船内への扉を見やる。

「お前らは先に食ってる。オレが探してくる」

「いえ、僕も行きますよ」

「ワシも探すぞ」

「あ、わたしも」

シリス、ミイヴ、アイリスが次々に言い出したので、ジェットは苦笑いする。

「いいから、テメエらは先に腹ごしらえしてる。大人数で言っても、また揉めるだけだ」

「む。それではワシらが、メイを説得できないみたいではないか」

「だから言っただよ」

ジェットに食ってかかるミイヴを、間に入ってシリスはなだめる。

「ミイヴ。ここはジェットに任せましょう。僕ら子どもでは、言い争いになるだけです」

「ぬう」

不満気な顔をするも、ミイヴは深くうなづいた。

船内に足を踏み入れるジェット。

どこにいんのかなと思っただら、メイはすぐ見つかった。

「っ」

「待て。匂いに誘われてきたんだろ？ だったら、おとなしく食いな」

階段を下りようとするメイを、ジェットは声をかけて引き止めた。

「わたしは、お腹が空いてませんから」

強がりやがって。

扉を静かに閉めて、ジェットは壁に寄りかかって会話を続ける。

「腹の虫の音がするんだが、そりゃどこで鳴ってるんだ」

「あなたのお腹じゃないですか？」

「おろ。確かに」

ジェットはお腹を軽く叩いて、メイのほうへ歩み寄る。

「近寄らないでください」

「そう意地を張んな。腹が空いてんなら、おとなしく食ったほうがいい」

「嫌です」

「オレらの作った飯が嫌なのか、それとも食べることが嫌なのか？」

「どっちもです」

「そうか。まだ、オレらを毛嫌いしてんだな」

「だから、なんだと？」

逃げられないと察したのか、メイはジェットへと詰め寄る。

その手に握られた杖は、微かだが風を起こしていた。

「やる気か？」

「それはあなた次第です」

メイは強気の姿勢を崩さず、ジェットと向かい合う。

「あなたとアイリスが、不吉な象徴だから……」

「まだ言うか。随分と根に持つもんだな。陰気なガキは、これだからめんどくせえ」

「いいから」

扉を開けて、外に出ようとしたら。

「あ」

「お」

アイリスが、皿に盛りつけられたカレーライスとスプーンを持って、ふたりの目の前に立っている。

「あ、はい。メイの分のカレーだよ」

ジエツトはメイから手を放した。

腕を組んで、壁に寄りかかってふたりのやりとりを傍観する。

「いらない」

「なんで？ お腹、鳴いてるよ」

「いらないって言ってるでしょ！」

メイの手が、アイリスの手を払った。

「あ」

そのはずみで、カレーライスが床に落ちてしまう。

「どうして、どうして優しくするの？ わたしは、あなたを」

「む」

「いた」

メイの言葉を遮ったのは、アイリスの平手打ちだった。

「な、にを」

涙目のメイ。

「どうして、どうしてカレーを粗末にするの？ 食べ物は、残さずきちんと食べなくちゃダメなんだよ！」

「っ」

アイリスは屈んで、掃除を始めようとする。

「いい。アイリス。それはオレがやる」

も、ジエツトに止められた。

「ええ？ でもお……」

「道具ならある。心配はいらない」

奇術のように手から黒い羽根箒を出して、ジエツトは後始末をす

る。

「メイ。まだカレーあるから、一緒に食べよ?」

「な、なんで」

「だって、メイとは友だちだから」

「え」

アイリスの笑顔と言葉に、目を丸くするメイ。

「それと、ごめんなさい」

「な、なんで謝るの。それは、わたしのほうが……」

「カロス君が死んじゃったのは、わたしの魔法が弱かったから。おじいさんの言いつけを守って、もつともつと勉強して、練習して、そうすれば……助けられたかもしれない。わたしが、力不足だったから……ほんとに、ごめんなさい!」

アイリスが涙ながらに謝る姿を見て、メイは困惑していた。

「な、なんでよ! わ、わたしは……あなたに、ひどいことしたのに」

「ごめん、なさい」

「っ」

何度も何度も頭を下げるアイリスに抱きついて、メイは号泣した。
「う、うう、うわあああああああああああああああああああああああああああ
あああああああっっっ」

泣き止んだメイは、甲板にて皆と一緒に。

「い、いただきます」

カレーライスを食べ始めた。

「いただきます」

「僕も、いただきます」

「いただくとするかの」

アイリス、シリス、ミィヴは一口いただく。

「っっん」

「っ」

三人は、笑顔満開になった。

ただひとり、ジェットだけが無言である。

「こら、ジェット。めっ」

「わ、わったよ。い、いただきます」

渋々ながら、いただきますをするジェット。

スプーンは持っているが、食べ進める気配がない。

「あ、メイ。どうかかな？」

「うん。おいしい」

涙を流しながら、メイはカレーライスを頬張る。

「そんなんじゃ、せつかくのカレーがしょっぱくなるぜ」

「ジェット」

「悪かった」

「まだおかわりあるから、ジェット。もっと食べてもいいよ」

アイリスが微笑みながら言うと、ジェットは顔をしかめる。

「どうした？ ジェット。スプーンが進んでおらぬぞ」

「こんなおいしいのに」

ミイヴとシリスがジェットをからかう。

「あのお」

「あ、おかわりどうぞ。まだまだありますけど、残りわずかです。

早い者勝ちですよ」

子どもの魔道士達がやってきたので、アイリスがにこにこ笑顔で
応対する。

彼女のカレーライスは大盛況だ。

「はあ」

ジェットは溜息ながらに、本音をぶつちやけた。

「実はな、オレ。辛いものが苦手なんだよ」

「え？」

びっくりして、アイリスはジェットのほうを振り向く。

そんなアイリスの顔を見つめながら、ジェットは肩をすくめた。

「マジですか？」

「これは、人生の半分を損してるのう」

「ぶ。ふふっ」

シリスは驚き、ミイヴはあきれて、メイはおかしくて吹き出してしまっ。

「お前らガキはカレー好きなのは解るぜ。でもな、オレは一応鳥なもんで。共食いはあんまりなあ」

そっという理由もあって、ジェットはカレーを食べ進めるのに乗り気ではない。

「む。ジェット。好き嫌いはダメっ」

「共食いに好き嫌いがあるのか。それは初耳だな」

「なんでもいいから、食べるのっ。残したら、怒るからねっ」

「もう怒ってるだろう。まあいい。とりあえず、一口な」

スプーンで鶏肉とらつくを避けてすくい、ジェットは勇気を出して頬張った。

「んぐんぐ。お、ちいとばかり辛いけど、甘さが引き立ってるな」

「うん。あんまり辛くすると食べられないから、甘めにしたの」

「こりゃあいい。鶏肉はダメだが、このまるやかカレーならオレでも食えるぞ」

ジェットはアイリスのカレーに、夢中であっつく。

「鶏肉がダメだなんて、初めて聞きましたよ」

「うむ」

「その黒のちびっ子ふたり組。オレに共食いしろと言ってるのか」
シリスとミイヴの突っ込みに、ジェットは頬に米粒がある状態で言い返した。

「別に、そんなつもりは」

「ないない。ないから、安心せい」

シリスとミイヴは、それがおかしくて笑っている。

気づいたジェットは指でそれを取り、しゃぶった。

「あ、ジェット。鶏肉がダメなら、わたしにちょうだい」

「そっか。ありがたい」

「うん」

アイリスは自作したカレーがほめられて、とてもうれしそうだ。

「なあ、アイリス」

「んん？」

「今度は野菜カレーを作ってくれねえか」

「うん。いいけど、どうしたの？」

「いや、カレーがこんなにうまいもんだとは思わなかったのさ。今まで辛くて舌が痛くなるから嫌だったんだが、これは……なかなかいける」

言つてて気恥ずかしくなるジェット。

左手で帽子を押さえ、顔を見られないようにしている。

アイリスは「えへへ」と、頬が緩みつばなしだ。

「そ、そっか。じゃあ、機会があったら作ってあげるね」

「おう。楽しみにしてるぞ」

食後、魔道士の皆は嵐に備えて帆ほをたたみ。

仲間の遺体をシートで包んで、腐敗が進まないように魔術を施してから、船倉へと運んでおいた。

「波が荒れてきましたね」

「嵐の中心からは外れている。ここで待機しているのが正解だ」

シリスとジェットは、曇り空をあおいで溜息をひとつ。

月明かりが弱いので魔道士達は各自、ランタンを持ち歩いている。それを観察するのを止めて、ジェットは後ろに停泊している船を見やった。

「そっいや、シリス」

「はい？」

「お前らの中に、成人は何人いる？ いや、何人いた？」

「僕とミヴを含めて、十代の魔道士が三十人。二十歳以上の魔道士に魔法剣士は、七十人いました。その中に魔導院の教師が五人ほど

いましたが、医療班のふたりを残して、他は戦死しています」

「そうか。んで、現在は？」

「点呼を取ってませんから、どうにも言えませんが……おそらくは、どちらも半分以下かと」

「だろつな。にしちゃあ、ガキをリーダーにすることに、違和感がありすぎるな」

「生憎、僕とミヴは魔道士として優秀ですよ」

「自分で言うかあ？」

「確かに、どうかと思いますけどね。トルミ工院長の弟子がミィヴ、レイエル副院長の弟子が僕。僕らはすでに、魔導院を主席で卒業してるんですよ」

「ほう？ ふたりして、主席なのか」

「ええ。まったく同じ成績で同時期にですな。ちなみに、僕らは魔道士ではなく魔導師です」

「ん？ どういう意味だ」

「ウィザードとソーサラーの違いですよ。女性の場合は、ウィッチとソーサレスの違いですかね」

「よく解った」

「おや、それぐらいで理解できるんですか」

「前にも言っただろう。オレは、ギルドの首取りと魔導院の連中が一緒に行動しているのを見たよ」

「ええ。ヨラシドナの魔導院と、南方の氷国ひやうこくギルウインのギルドは、協力関係にありますからね」

「しかし、あの孤島は……ヨラシドナの領内だよな。どうしてギルドの連中に協力をあおがなかった？」

「質問で返して悪いですが、どうしてそれを僕に聞くんです？」

「お前なら、知ってそんな気がしたからな」

「僕は知りませんよ」

「本当か？」

「ええ。僕も、レイエル副院長の言動に不審な点があると……皆と

話してから感じていました」

「不審？ 師を疑うのは、あんまりよろしくないな」

「信じたいとは思いますが。けど、今回はあまりにもおかしすぎる」

「……………」

羽根帽子を左手で押さえて、ジェットは柱の上にあるたたまれた帆を見上げた。

「すみません。僕は立ち話をしている余裕はありませんでした」

「ん？」

「これでも一応リーダーなので、これで失礼します」

「そうか」

シリスはジェットに一礼して、船室のほうへ歩いていく。

顔色が悪いな。

このシリスってガキ、やっぱり何か隠してやがる。

「ふん」

走り去るシリスを見つめながら、ジェットはアイリスを探そうと目線を動かした。

その時。

「きゃああああああああああああっ！」

向こうの船で、悲鳴が聞こえた。

ジェットはそちらを振り向いて、目を見開いた。

「しまった。思ったことが、今まさに起きやがったぜ」

「じ、ごめんなさい」

「黙っている」

「おい、どうしてこの女を生かしておくんだ？ こいつは虹だぞ。」

向こうにも、黒月鳥がいるんだ。いつまでこいつらと一緒に行動しなくちゃいけないんだよ。ああ？」

魔道士の成人グループがアイリスを人質に取っていた。

そのうちの男性ひとり、彼女の首にナイフを突きつけている。

「ご、ごめんなさい。わたしのカレーが気に入らなかつたんですか？」

「いいから、黙ってる！」

涙目のアイリスは、眼前のナイフにおびえている。

「や、やめて」

アイリスを救い出そうと、メイが杖を片手に接近する。

「メイ。お前はだまされているんだ。ミイヴもシリスも、こいつらに利用されてるんだ。いつかきつとこいつらは、俺らを事故に見せかけて殺す。そうに決まっているんだ！」

「ひ」

アイリスの頬に、ナイフの刃が走る。

微量の血が、甲板に滴り落ちた。

「アイリスを、アイリスを離して！ 彼女は、何も悪いことをしてないよ」

「そうだそうだ！ ボクらは、アイリスに助けられたんだ。その恩を忘れて仇で返すなんて、卑怯だぞ」

「黙れ！ お前らは、虹がどういふ存在なのか知らないはずはないだろう。この不吉な存在を、いつまでも生かしておくことが間違いないのだ」

子どもと大人の言い合いは、平行線のまま。

ふと、この場にひとりの少女が駆けつけた。

「離してやらんか」

ロッドを構えて、成人グループに声をかけるミイヴ。

しかし、彼らは応じる気配を見せない。

「ミイヴ。貴様のようなガキに指図されるいわれはない」

「ワシはこの一団の副リーダーじゃ。そなたらの暴拳を見逃すわけにはいかん」

「ふん。虹を生かしておくことが、何よりの暴拳ではないのか」

「アイリスは皆の命を繋いでくれた。その恩義を忘れて、刃物を向けるなど……あつてはならんことじゃ」

左右に首を振って、説得を繰り返すミイヴ。

「このまま不吉を持ち帰るなどできん。今ここで、抹殺してくれるわ」

「な、待て」

男が、アイリスに刃を突き刺そうとする。

「な、なに……っ？」

その男の動きが、急に止まった。

「わりいが、そいつあ許せねえ。アイリスとは約束があるんでね」

アイリスを人質に取っている男の背後に、ジェットが現れた。

「く。お前も殺して」

「不可能だ。もう夜の帳は下りている。オレあ、明るいところは苦手なんだよ。暗いところは大好きだけだな」

不敵な笑みを浮かべながら、ジェットは男からアイリスを取り返した。

その両腕に抱えて、子どもグループのほうに歩み寄る。

「く、な、なんだ。何をした」

「影縫いだよ。月明かりがあるから、どうにか成立した」

ミイヴの隣に位置して、説明しながらジェットはアイリスを下ろす。

ゆっくりと振り返り、ジェットは大人グループをにらみつけている。

「それにな、オレはアイリスのカレーを予約してるんだ。それをまだ食べてないのに、こんなことされちゃあ……腹の虫が収まらねえな」

「ひ」

アイリスにシャツの裾をつかまれ、ジェットはいぶかしげな目線を彼女に向ける。

「だ、ダメっ」

震えながらも、アイリスはジェットに何もしないでと訴える。

「そうか。解った。気絶させる程度で済まそうと思ったが、それはオレの役目じゃないな。ミイヴかシリスがやらなくちゃいけない」
「うむ」

怒り心頭に発しているミイヴは、青黒い石のロッドを掲げて。

「だ、ダメだよ。ミイヴ」

呪文を口ずさみ、魔法を唱えようとしたミイヴ。

アイリスはその前に立ち、涙をこぼす。

「わたしが、わたしが悪いの。わたしが怒らせるようなことをしたから。ご、ごめんなさい」

頭を下げ謝るアイリス。

「ごめんなさい。ごめんなさいっ」

ミイヴは唇を噛み締めて、ロッドを下ろした。

「ミイヴ様」

「メイ。ここはアイリスに免じて、許してやるうと思っ」

不安なメイは、大人グループをちらりと見やる。

「で、でも。また何かされたら……」

「その時は、その時じゃ。ワシらは、先入観にとらわれすぎておるのさ。虹といい、黒月鳥といい。何もかも全てが、魔導院で教わった通りじゃとは限らん」

ミイヴはジェットのほうを見やり、頭を下げた。

「いいさ。お前らが謝る必要はない。全部、オレが悪いんだ」

「どうして、そなたが謝る」

頭を上げて、目を白黒させるミイヴ。

「オレがアイリスから目を離れたから、こうなったんだ。ほら、アイリス。謝ってないで、行くぞ」

「え、でも……まだ、許してもらってないのに」

「こういうのは、時間が解決するのさ。冷静になって考えてもらえばいい。いつまでもここにいと、向こうの頭の血がまた上っちまうぜ」

「そ、そっか。その、ごめんなさい。今度こそおいしいカレーを作りますから」

何度も何度も頭を下げて、アイリスはジェットとともに向こうの船へと戻った。

「シリスめ、どこで何をやっておる？ まあ、よい。あのふたりの懐が深くて助かった」

「ミイヴ様。その発言は……」

「解っておる。ワシらが束になつてかかっても、ジェットには敵わん。何せ今は、黒月鳥が真価を魅せられる夜。微かだが明るかったあの孤島での戦闘も、竜人を屠れるほどじゃ。下手に刺激せんほうがよい」

「わたしは、ジェットさんは優しい方だと思いますけど」

「ん？ どうしてそう思う」

「カロス君が死んで、わたしが自暴自棄になつて手を出しても……一度も、殴りませんでしたから」

頬を指でこすりながら、メイは言う。

「でも、アイリスには叩かれたんですよね。食べ物を粗末にしちゃいけないって」

「ワシも、ふたりが悪者だとは思わん。話していると、今まで学んだことはなんじゃったのか疑いたくなる」

腕を組みながら、ミイヴは雲から覗く月を見上げた。

歩いて船へと戻ったアイリスとジェットは、シリスに出迎えられた。

「おや、おふたりとも。向こうで何かあったようですが……」

「気にするな」

「そうですね」

ジェットは左手で帽子を押さえながら、ふたりから離れる。

アイリスが心配そうに、シリスの顔を覗き込んだ。

「な、なんですか」

「顔色、悪いよ」

「はは。船酔いです。波に揺られて、少し気持ち悪くなっただけですよ」

「背中、さすさすしようか？」

「い、いいですよ。横になって休めばいいだけなので」

シリスは頬を染めて、後ずさりする。

「ふあああああああう」

突然、アイリスは大きなあくびをした。

「うう。ちよつと眠いかも」

目をこすりながら、アイリスはジェットに寄り添う。

「まあ、あれだけ回復魔法を行使してるんだ。疲労も蓄積するよな」
人差し指で帽子のつばを上げて、ふらついているアイリスを撫でるジェット。

頭を押さえて、転ばないようにする意図があるようだ。

「空き部屋があるので、案内しましょうか？」

「皮肉にしか聞こえないんだよなあ」

目を細めて、シリスに抗議するジェット。

部屋が多く空いているのは、戦死者が続出したせいだ。

「そう言わないでください。僕の部屋とミヴの部屋の間になりますけど、それでよろしいですか？」

「待て。それは、オレとアイリスのふたりで、ひとつの部屋を使えって意味か」

「ええ」

「それは困るな。何せオレは男なんぞね」

意味を察し、シリスは眉をひそめる。

「でしたら、アイリスはミヴの部屋に泊まればよいでしょう」

「話が早くて助かる」

「ジェットは、ひとりのほうがいいんですか？」

「オレは夜行性なんでね。夜中は眠れないんだ」

肩をすくめて、ジェットは自身の生活リズムを説明した。

「なるほど。なら、船が何者かに襲われないように見張りをお願いできますか」

「それは別に構わないが、オレの大剣はどこにやった？ まな板に使われて以降、見当たらないんだが……」

「それなら、重くて誰も運べないので……タルと一緒に放置されているはず」

「そうか。済まない」

ジェットはふたりを残し、大剣を拾いに行った。

「あの、シリス」

「ん？ 难道でしょう」

「わたし、ジェットと一緒に寝たいんだけど」

アイリスの申し出に、シリスは面食らう。

「は、はあ。本人がさっき、嫌がってましたけど」

「そ、そっか」

アイリスは残念そうに、戻ってくるジェットを見つめていた。

「ん？ どうしたよ。そんな人恋しい目でオレを見てさ」

「うっん。なんでもない」

頬をふくらませて、アイリスはシリスの手を取った。

「おや、どうしました？」

「先にミヴの部屋で休んでる」

「そうですか。でも部屋の鍵はミヴが持ってるので。ミヴが帰ってこないと……」

噂をすれば、なんとやら。

「ん？ おや、シリスにアイリス。ジェットも。皆してどうしたのじゃ」

こちらの船に戻ってきたミィヴとメイ。

気だるそうな表情のミィヴは、あくびをして眠たそうだ。

「ミヴにメイ。向こうで何かあったようですが、どうなされました」

「気にするな」

「はい。左に同じく」

ふたりにはぐらかされたシリスは、深い溜息をつく。

「まあいいですけどね。ジェットと僕は夜番であたりを警戒します。もう嵐は遠くのほうに行きましたので、急いでヨラシドナへと帰りましょう」

淡々と説明するシリス。

ジェットは帽子を押さえながら、こつ訊^{たず}ねた。

「オレはこつちの船か？」

「ええ。僕はあちらの船です」

「そうか。なら気をつけるよ」

「やっぱり、ごたごたがあつたんじゃないですか」

「解ってるんだつたら、どうして来なかった？」

「言いませんでしたか、僕は船酔いしてるんです」

「だったら休んでろ」

「そういうわけには」

「けつ。そういう頑固なガキは、オレあ好きじゃないんだ」

その発言に驚いて、お口があんぐりとなるアイリス。

「ん？ どした。ご主人」

「むつ」

皆はアイリスが不機嫌になった理由が解らず、小首を傾げている。

「おつと、アイリス。お前は早く休んでたほうがいい」

「でも」

不安そうに、アイリスはジェットの顔を見上げる。

「オレの心配はしなくていいさ。黒月鳥は、夜行性。明るいうちは眠くてしょうがないんだ」

「ちゃんとねんねしないと、身体に悪いよ？」

「わくってるよ。だいじょうぶだから、早く寝とけ」

「う、うん」

それでも心配なアイリス。

皆に手を振りながら、ミヴと一緒に船内へと歩いていった。

「メイ。お前はとうするんだ」

「……………え？」

「なんだ。ぼつっとして、どうしたんだ」

「あ、いえ。ちょっと胸騒ぎがして……………」

胸元に両手を重ねて、星空を見つめるメイ。

「まだ混乱してるのか？ だったら横になって、ゆっくりしてる」

「そう、ですね。わたしも休みます。いろいろあって、気持ちを整

理したいです……………」

「そうか。眠れなかつたら、ここに来い。話ぐらいならしてやれる」

「あ、ありがとうございます」

「礼を言われるようなことじゃないさ」

帽子を左手で押さえながら、ジェットは帆柱ほしじのところで腰を下ろした。

「では、僕も失礼します」

軽く会釈えしやくするシリス。

「ああ」

「お気をつけて」

「別に、旅に出るわけじゃ……………」

ジェットとメイが笑うと、シリスもつられて微笑んだ。

部屋に案内されて、アイリスは驚く。

「わ。黒だらけ」

ミイヴの部屋は、カーテンとクッション、バッグなどが置かれていた。どれもこれも黒である。

予備のトンがり帽子が木の棒にかけられていた。

唯一ゆい黒でないのは、ベッドに本棚とその中の本ぐらい。

「む。い、嫌か？」

「うん。あ、本がいっぱいある」

「その本棚には魔道書の類はないぞ。全部、恋愛小説ばかりじゃ扉を閉めてから、ミイヴははしゃぐアイリスに注意する。」

「へえ。ミイヴも、そういうの読むんだ」

「ん？ そういうアイリスは、何を読んだのじゃ」

「あ、おんなじのがあったよ」

そのアイリスが手にしたのは、『翼の歌』という本だった。

「それは、人間の男が天使の娘に恋をする話じゃったか」

「うん。わたし、おじいさんにこれをもらって、何度も何度も読んだんだ」

「なるほど。ジェットがウソをついていると言っていたのは、それか？ アイリス」

「あはは」

「最後は確か、主人公の男が天使の娘にウソをついて、ふたりが永遠に別れる。だったかのう？」

「うん。でもさ、どうして天使は……男の人のウソを見抜いていたのに、飛び去ったんだろうね」

「解らんさ。それは、ワシらが大人になれば自然と理解できよう」

「そっかあ」

本を棚に戻して、アイリスはミイヴと一緒にベッドに腰を下ろす。

「そういえば、アイリス。そなたはなぜ、ジェットを召喚した」

「え？ あ、うん。おじいさんがくれた本はね、魔法を勉強するものと、退屈をしのいでくれる本だけだったんだ」

「魔道書と小説だけか」

「うん。わたしね、そのしょうせつだっけ？ それを読んでさ、空を飛びたいって思ったの」

「空が、飛びたい。まさか、そんな安易な理由で」

黒月鳥を、という言葉を食べ飲み込んだミイヴ。

アイリスは知らない。黒月鳥がどういう存在なのかを。

ミイヴは口を結んで、アイリスの話に耳を傾けた。

「うん。おじいさんが教えてくれた、その本に記された物語を見聞きしてね。それで翼があつたら、どんなにいいだろうって。ずっとそればかり考えてた」

アイリスが空に憧れる理由を知って、ミイヴは複雑そうな顔をした。

「空を飛びたい、か」

「ミイヴは、飛んでたじゃない」

「あれは浮遊石じゃ。このロッドにはめこまれた、浮遊石のおかげよ
青黒い石。それを浮遊石という。」

重力を宿しており、使用者の魔法攻撃を高める ことはない。

使い手の移動を補助し、かつ重力による補助魔法を強化するくらいしか効力がないのだ。

「へえ。それがあから、空を飛べるんだ」

「飛べはせんよ。地面からほんの少しだけ、浮き上がれるだけじゃ
でも、少しは飛べるんでしょ？」

「ぬ。ま、まあ、浮くぐらいできるし。高いところから飛び降りても、これがあるから着地に失敗せん。そういうアイリスは、これで浮きたいのかや？」

「うん。ちよつとだけ」

「さようか。なら、ほんの少しこれで遊んでやるつぞ」

「わあい」

ふわふわと浮き上がるアイリス。

飛ぶとは少し違うが、それでも満足らしい。

「わあ。ジェットのマントが、翼みたい」

「ふむ」

アイリスが羽織っている黒の外套が波打って、本当の翼のようにはためいている。

「わたしも、浮遊石が欲しいなあ」

「浮遊石の塊は、とても貴重じゃ。そう簡単には手に入らんぞ」

「え。そうなの？」

「採掘量が極めて少なくてな。その価値もかなりのものさの」
「ミイヴはゆっくりとアイリスを下ろして、溜息をひとつ。」

「あ、疲れちゃった？」

「少しな」

あくびをこらえて、ミイヴはロッドをベッドの上に置いた。

「ご、ごめん」

「謝らんでよい。ワシも時折、浮いて遊ぶからのう」

「そ、そうなんだ」

もじもじしながら、アイリスはミイヴの隣に座った。

「どうした？ 何か、相談したいことでもあるのかや？」

「え、な、なんでわかるの？」

「何となく、じゃ」

びっくりするアイリス。

ミイヴは目を細めて、口元を歪めた。

「わ、わたしねっ。その、ジェットに好きだって言われたんだけど
……ど、どうしたらいいかなっ？」

アイリスの声は、緊張のせいで少し裏返っていた。

「なぬ？ い、いつの間に。あ、あやつめ、そんな趣味があったと
はのう」

「え。だってその時、ミヴも一緒にいたよ？」

「は？ そ、それはいつの話じゃ」

「お城で、竜人と戦う前に」

「ん？ あ、ああ」

「あ、思い出したんだ」

「なるほど。確かにジェットは、アイリスに好きと言ったな。しか
しそれは、別な意味のようにも……」

「え、ち、違うの？」

「まあ、確かめなければ後で本人に告白するがよい」

「え、え、えっ。わ、わたしにはむりだよっ」

「おや、アイリスはジェットが嫌いなのかや？　大好きと言って抱きついてたような」

「わわわわわわわわっ。わ、忘れてっ」

目をつむって、手を合わせて頼み込むアイリス。

「ちやかすつもりはない。それで、アイリスの気持ちはどうなのじゃ？」

ミイヴの問いに目線をさまよわせながら、アイリスはこう答えた。

「す、好きだよっ」

「なら、それを本人の前で言えばよい」

「む、むりっ」

緊張して固まっているアイリス。

自分もこれぐらい、素直に気持ちを口にできれば　と。

ミイヴは、静かに溜息をつくのだった。

夜の潮風は冷たい。

鼻の下を指でこすり、くしゃみを我慢するジェット。

「そっいや、アイリスに外套を預けたまんまか」

脇に置いてある大剣の羽根に手で触れて、薄明かりをくれる月を見上げる。

「……。誰だ？」

低い声を出して、ジェットは背後にいる何者かに問いかけた。

「あ、その」

「なんだ。メイか。脅かすなよ」

「そ、それはこちらの台詞ですっ」

帆柱に寄りかかっていたジェットは、メイを反対側へ手招きする。

「やっぱり眠れなかったか」

「はい。お邪魔でしたか？」

腰を下ろして、メイは反対側にいるジェットの手を握った。

「おい。何してる」

「寒がってるみたいなので、せめて手だけでも」

「はあ。まあいいけどさ」

羽根帽子を深く被って、ジェットはメイに聞く。

「んで、どうしたよ？」

「はい。わたし、カロス君に想いを伝えてなかったなあって。後悔してるんです」

「そうか。一度も、こくってねえのか」

「ええ。せめて、一度だけでいい。もう一度、カロス君に逢いたい。そう思ってたなら、胸が苦しくなって……」

「想いつてのは、言葉に出さなくちゃ伝わらない。難しいものだな」

「そういうジェットさんは、誰か好きな人がいるんですか？」

「唐突だな。まあ、いたにはいたよ」

「へえ。聞かせてもらえますか」

「けどそいつはもう、この世にはいないだろう」

「あ」

「いいさ。気を遣うな。そいつもアイリスと同じで、虹だった。髪も瞳も、遊色だった」

「そう、だったんですか。もしかして」

「いや、オレはそいつを殺していない。むしろ、見殺しにしちまった」

「み、見殺しに？ ど、どうして」

「怒るな。手がいてえぞ」

驚いて、つい手を放してしまふメイ。

「だ、だって……どうして、好きな人を」

「そいつは、不治の病だったのさ。自分の病を治そうと必死で、オレも三年近くその手伝いをした。それでも、ダメだった。そいつの死に際だけは見たくなくなつたんでな。逃げ出しちまつたんだよ。無力な自分を恥じて、今もどう償えばいいのか解らないでいる」

息を飲むメイ。

しばらくして、メイはジェットの手を優しく握った。

「やっぱり、ジェットさんはいい人ですね」

「オレは不吉だよ。今までに、ギルドの首取りやお前らの仲間を何人屠ったか。それを数えてすらいねえ。最低な男さ」

「それでも、後悔しているんでしょう？」

「そうだな。そいつと別れてから、オレは自分ひとりで医学を勉強したり、薬についてあれこれと学んださ。それでも、ちんぷんかんぷんだ。苦手なものにや、手を出さないほうがいいと思ったよ」

……………沈黙。

何度も呼吸を繰り返して、メイはこう切り出した。

「アイリスのこと、大切にしてくださいね」

「な、なんでそうなる」

「あ、やっぱりその反応は……好きなんですネ」

「ちっ。うっせえガキだな」

「そういうことを言うジェットさんも、ガキだと思えますけど？」

「なんだと？」

「きやつ」

手を引いて、ジェットはメイを近くへ引き寄せる。

「オレは、アイリスが嫌いだよ」

「ど、どうして。もつと素直になつたらどうです？」

姿勢を低くしたまま、にらみ合うふたり。

「うるせえな。オレはアイリスを利用するだけ利用して、捨てるつもりなんだ」

「そ、そんなひどいことを言わないで。殴りますよ」

「お前からは散々殴られた気がするんだがね」

「アイリスを侮辱するような発言をするからです」

「けっ。オレはもう背負うのはたくさんだ。背負ったって、悲しみしか残らない。あんな経験はもうごめんだね。だからもうオレは、誰の世話にもならない。誰とも歩まない。そう決めたのさ。だからな、アイリスと長く付き合う気はないんだよ。解るか？」

「ウソです」

「なんでだ」

「ジェットさんは、偽悪者ですね」

「っ」

「ほら、凶星です。皆から嫌われようと、必死で悪者を演じてるんです。でも、本当はそうじゃないんでしょう？ わたしだけじゃない。皆にも、その優しさは伝わってるんです。あなたが黒月鳥でも、皆は理解してくれます」

「解って言っているのか？ 黒月鳥は、裏切りと絶望の象徴だ。そんな不吉が、友好なんて反吐へどが出るぜ。向こうの船の魔道士だって、オレとアイリスを毛嫌いしてたんだ。全世界で虹と黒月鳥を嫌っているヤツが何人いると思ってるんだ？ ……ほとんどだよ」

「全部とは言わないんですね」

「ふん。今現在、物好きがこの船に数人いるからな」

「わたしたちも、最初は虹と黒月鳥は不吉だと魔導院で教わりました。けど、いざ接してみたらそうじゃなかった。一部の大人は、それを認めようとはしませんけどね。わたしたち子どもは、アイリスとジェットさんに助けられたんです。その恩義を忘れて、ふたりを傷つけるなんてできない。それに、おふたりが作ったカレーは……魔導院の食堂で食べてたカレーよりもずっと、ずっとおいしかったから」

「カレーで懐柔かいじゅうされてんのかよ」

「わたしたち子どもは、下手な理屈や説法よりも、おいしいご飯に目をキラキラさせるものですよ」

「自分で言うな」

「あはは」

メイの笑顔を直視できなくなったのか、ジェットが目線をそらす。

「あ、照れてます？」

「ふん」

そっぽ向いたジェットの反応を見て、メイはうれしそうに笑う。

「ジェットさんって、案外可愛いですね」

「な」

そんなことを言われて、ジェットは顔を真っ赤にして反論する。

「ん、んなわきゃあない。お前、風邪でも引いてんのかっ?」

「それはこっちの台詞です」

「だ、黙ってる」

口角を上げながら、メイはおもむろに立ち上がる。

「ありがとうございます。少し、気が楽になりました」

「そうか。いい恋をしるよ」

「あはは。今は、ジェットさんを好きになってしまいそうです」

「な、なぬっ?」

「うふふ。冗談ですよ」

終始メイにからかわれて、ジェットは腕を組んですねてしまった。

「ジェットさん。アイリスのことを、大切にしてくださいね」

「……………」

「では、おやすみなさい」

「オレは寝ないけどな」

「あはは。あいさつですよ、一応」

深緑の長い髪を風になびかせながら、メイは自分の部屋へと戻った。

「まったく、同じようなことを何度言われるんだ。今日はよ」

第3話

時はさかのぼり、孤島にて。

『なに?』

ジェットが竜人へ剣閃けんせんを放とうとした時、ふいと敵が目を見開いて、明後日のほうを向いた。

『お、まえ……』

『ばいばい』

竜人は何か言おうとしたが、その口は小さな手によって閉じられた。

ひとりの少女が竜人を押し倒し、その頭を片手で押し潰したのだ。
『な、なんだと。たった一撃で……』

ジェットの目の前に立っている少女は、銅色の外套を羽織り、手についた返り血をハンカチでいぬいにぬぐっている。

その肩まである長い髪も、大きな瞳も、全て銅のような光沢を持っていた。

『くつ。何者なにものかは知らねえが、オレの獲物をよくも
ジェットが抜刀しようとした時。』

少女は一瞬で彼の懐に踏み込み、軽く跳んで、人差し指でジェットの左肩をつついた。

『ぬ、ぬうあああああああつ!?!』

あまりの苦痛に、ジェットは左腕を手で押さえる。

『あんまり暴れられても困るんでね。静かにしててもらっよ』

『デメエ……よくも』

着地して、余裕の笑みを浮かべる少女。

『ふふつ。君は虹に選ばれたんだ。彼女を、アイリスを大切に
あげて』

『な、なんだと? お前は、いつたい……』

『もうこの島も城も不必要だ。早く飛び立つといい。もうすぐこ』

は、誰にも踏み込むことができない領域になる』

『な、何をする気だ』

『ふふ。君に死亡フラグを立てるつもりはないんだ。けれどね、それ以上聞くと、君を今すぐにやるよ』

ジェットは身の危険を感じ、左腕を庇いつつこの島から飛び去った。

『ちょっと、言い方が乱暴だったかな。反省しなくちゃ、ね』

ヨラシドナ領内の南方に存在する、港町ツハノ。

そこにある王立魔導院、三階の院長室。

青緑のカーペットが敷かれ、観葉植物が飾られた、質素で落ち着いた雰囲気のある部屋だ。

しかしそこは、真っ赤に彩られていた。

「この程度なのね。あなたは」

血にぬれた白の外套をまとう、ひとりの女性。

その藍髪あいがみは腰まで伸びており、返り血によって妖しく輝いている。切れ長で目力めぢからのある瞳には、憎しみの炎が宿っていた。

「レイ、エル……っ」

樹木の杖を支えにして、ふらつきながらも立ち上がるようにする老婆。

「この死に損ないが。まだ口が動くのね」

老婆の身体には、無数のナイフが突き刺さっていた。

「な、なにを……かんがえているの」

「その台詞は、十五年前のあなたにそっくりそのままお返しするわ」

「ま、まさか……」

その発言を受け、老婆は目を見開いた。

「あなたがこうなるのは、当然の報いよ」

「そ、そうね……わたくしは、あなたを……」

「その名で呼ぶな。不愉快だわ」

女性は指に挟んでいたナイフを投じて、それを老婆の額に突き刺した。

その刃は頭骨を貫通し、鮮血を散らす。

「ご、め……」

老婆はあおむけに倒れ、息絶えた。

「ふん」

頬についた返り血をハンカチでぬぐって、女性は身を翻す。

「もう、手遅れなのよ」

そう吐き捨てて、女性は院長室を後にした。

扉を開け放ち、廊下に出た瞬間。

「不愉快ね」

王立魔導院に属する魔道士に魔法剣士が、彼女を取り囲んだ。

「レイエル副院長。いいや、反逆の使者……レイエル！」

教師と生徒で構成された面々と対峙し、女性は溜息をひとつ。

「前々から、あなたの言動はおかしかった。よもや、ここまでやるとは」

「レイエル様。いいえ、もうあなたは」

うるさいわね、もう。

窓を割って飛び降りようか、この群がる人間を皆殺しにして、優雅に立ち去ろうか。

いずれにしても、戦闘は避けられないそうにないわね。

「あの老婆を殺して、何が悪いというの？」

腕を組んで、女性は自分のしたことを正当化する。

対する人々は、女性の発言に信じられないといった顔をした。

「なっ、貴様。この期におよんで、何を言うか！」

「別に、あなた達が弑逆だというなら、それでも構わないわ」

「くっ。話し合いなど、もはや時間の無駄だ」

「話す？ ふっ、そうね」

両手をジーンズのポケットに突っ込み、女性はそこから二枚のハンカチを取り出した。

それを見せつけて、不気味に微笑んでいる。

「なんだそれは。そんなもので、我らとやろうというのか」

「ええ、そうよ」

女性はハンカチを放り投げて、眼前の人間で断末魔を奏^{かな}でた。

「むぐうううううう」

「あなたが最後のひとりよ。あなただけは特別に、苦しむように殺してあげる」

「ううう……っ！」

血みどろの人間とナイフが無数に転がる、月明かりが差し込む魔導院の中庭で。

女の子の鼻と口をハンカチで塞ぎ、女性はその子が苦しむ様子を観察していた。

「ふふっ。命乞いのつもり？」

涙目で手を伸ばして、女性に助けると訴える女の子。

それでも女性は、ハンカチを外すことはしない。

「ほら、もっと苦しみなさい。誰かが助けると祈りなさい。

その一縷^{いちろう}の望みなど、誰も叶えてはくれないのよ」

女性は女の子の充血した目を見て、溜息をひとつ。

「意外に持つわね。まあ、いいけど」

ナイフをどこから取り出して、それでとどめを刺そうとした時、女の子の手が、力なく地面に落ちた。

「くくっ、あっはははははははははは」

高笑いしながら女性は、事切れた女の子からハンカチを回収する。

「確か、この子はネイだったかしら。双子の妹のメイは、あの島のユイフェヴに殺されてなければいいけど」

その瞳から、涙がこぼれ落ちた。

「な、なんで……」

悲しかった。空むなしかった。そして、何よりもさみしかった。自分はこんなことをするために生まれたんじゃない。

でも、現実ざいじつは女性を殺戮さつりくへと駆り立てた。

「いつから、あたしはこうなってしまうたんだろっ」

七色の美しい羽根を持った小鳥が、女性の右肩に止まる。

差し出された手をクチバシでつついて、それから女性の首くびに頬擦ほおすりした。

「結局、あたしもあの少女と同じなのね」

まだ女性の両眼には、憎しみの炎が燃え盛っていた。

同じ学び舎で時を過ごした、仲間の亡骸なきがらに背を向けて。

「残るは、ただひとり。待ってなさい。必ず、必ずこの手で殺してやるんだから」

女性は復讐のために、港へと歩き出した。

時は戻り、アイリス達を乗せた船は。

道中何事もなく、港町ツハノに帰港した。

まだ月が空にあり、星も瞬いている。

灯台も船が迷わないよう、あたりを照らしている。

しかし、町は別な意味で閑散かんさんとしていた。

「なんだこりゃあ」

ジェットは血の臭いを感じ取り、我先に無人の町に降り立つ。

町はレンガで舗装ほそうされており、家屋は石造と木造、レンガ造りのが混じっている。

いたるところに花壇かだんがあるも、どの花にも元気はなかった。

水をやる人もおらず、雨も降っていないからだ。

「ちよっと。ジェットさん、ひとりで先走らないでください」

「シリスか？」

向こうの船から大声で呼びかけられ、ジェットは振り向かず帽

子を深く被る。

「ええ。漁師さんが出迎えにも来ないなんて……様子が変ですね。皆がそろそろまで、そこで待機していてくれますか」

「わーった。ただ、敵が来たら例外だかな」

「解ってますよ」

……ちっ。

内心、舌打ちしながら、ジェットはそこからあたりを見渡した。
「人が、倒れているな」

遠くにあるので、生存しているかどうかは確認できない。

「早くしてくれねえか」

ぼやきながら、ジェットは後ろを振り返る。

ふたつの船が停泊し、皆が降りてくるのを待っていた。

「ち。先に向かうとするかね」

前を向いて、帽子から大剣に手をやるうとした瞬間。

シリスの乗っている船が、不意に爆発を起こした。

「な、なんだ？」

驚いて、ジェットはそちらを振り向いてしまった。

「ツキエエエエエエエエエエエエエエエエツ」

背後から急襲する、ひとりの鳥人。

「ちい」

姿勢を低くして、ジェットは右手の爪を振り上げる。

しかし、それは空を切った。敵が高度を上げたからだ。

「キイヤアアアアアアアツ」

「この甲高い鳴き声。緑の羽根。ハルピユイアか？」

旋回してこちらを見下ろしている鳥人を見て、ジェットは絶句した。

「なんだ？ あいつは、鳥人なのか。にしちゃあ、誰かに似て」

手足の鋭い爪。耳から生えた緑の羽根。

言葉の途中で、ジェットは確信した。

深緑の長髪に、同色の瞳。そして、その顔には見覚えがあった。

「メイ、か？ いや、そんなはずは」

「え？ ね、ネイお姉ちゃんっ？」

残存している船の甲板から、聞き慣れた声がした。

「な、メイ。屈めえ！」

「っ」

ジェットの叫び声に反応して、メイはしゃがんだ。

姉のネイは妹のメイのほうへ飛び、足の爪でつかみかかる。

間一髪。メイは体勢を崩しながらも、それをかわした。

「お姉ちゃん。ど、どうしたの？ わ、わたしだよっ？」

「キュルキュル」

尻もちをついて、後ろに逃げるメイ。

上空ていくうして、妹を見下ろすネイ。

「い、いや」

「キアアアアアッ！」

「く、間に合わねえ」

メイへと迫る尖爪せんそう。

その窮地は、黒の少女が救った。

「“アイソレイト”」

「フツキュオオオオッ!？」

ネイは分散魔法によってジェットの近くに叩き落とされ、地面に這いつくばる。

ミイヴはメイの前に立ち、ロッドを構えて叫んだ。

「ジェット。早く船を離れ、町中まで引きつける！ 海上で鳥とや

りあうのは危険じゃ！」

「わあってるさー！」

ジェットは大剣を抜刀し、動きの止まったネイへと斬りかかろうとした。

「だ、ダメえっ！」

が、メイの制止の声に動揺し、ジェットは大剣を抜けなかった。

「キュアアッ」

地面を蹴って後退したネイは、耳から生えた翼をはためかせて停空している。

「クツケケケケケケツ。 “ストーム・ブレード 凄絶たる暴風”」

両手を合わせて、その中で竜巻を育み、ネイはそれを前方へ解き放った。

「ちいつ！」

ジェットは回避をせず、大剣を前に構えて突風を受け止めた。背後にある船に直撃するのを、恐れたためだ。

「な、く、くそっ」

背中から翼を出現させて、どうにか踏ん張っているジェット。じりじりと、押されている。

「は、早くそっから降りるお！ そっ長くは……持ちこたえられねえぞー！」

港に降り立ち、杖にロッドを構える魔道士達。

しかし、敵がメイの双子の姉であるネイだと知って、手をこまぬいている。

「各自散開して、あのネイを生け捕りにするのじゃ。よいな。殺してはならんぞ」

ミイヴは船の上から指示を出して、それから船内へと走った。

「は、はあ。よ、ようやくかよ」

攻撃が止んで、安堵するジェット。

「ったく、ふざけた威力だ。姉妹そろって、風使いたあ厄介だな」

大剣を前に下ろしたままで、ジェットは飛びそうになった羽根帽子を手で直す。

「ケツケケケケケツ。キユナアアアアツ」

甲高い声で鳴くネイ。

手から伸びた鋭利な爪をなめて、舌先から血を滴らせた。

「自虐性まで、ハーピーそっくりだな」

「は、ハーピーとは、なんですか？」

背後にいる魔道士が不安がっているので、ジェットは手短にその

特徴を伝える。

「人に近い鳥の一種で、知能はとぼしいが戦闘能力は高い。通称、美しい怪鳥と書いて美怪鳥びかいちようという。クチバシ、翼を交えた腕、足のかぎつめ鉤爪、胴体と顔は人間の女に近い。だがあれはハーピーと人間が合成してできたもんだ。いろいろと相違点がある。あの手足の爪には警戒しろよ」

「は、はい」

ジエツトは大剣を背負って、ネイへとゆっくり歩み寄る。

「おい」

「キユケ？」

「話を通じそうだな。お前は」

ネイは接近し、ジエツトへと足の爪撃を放つ。

対するジエツトは右手の爪で合わせ、それを打ち払った。

「いきなりなあ。ごあいさつだね」

左手で反撃しようとしたが、メイのことを思い出して動きが止まる。

「くそ。ガキに情を移すんなぞ、オレらしくない」

ネイを蹴飛ばして、間合いを開けるジエツト。

地上を転がされ、体勢を直したネイは、足下のレンガで四肢の爪を研いでいる。

「クケ？」

その間に、魔道士がネイを取り囲んだ。その中にメイの姿はない。

「無理もないか」

ふと、ジエツトは後ろにアイリスとミィヴがいることに気づく。

そこにも、メイはいなかった。

「遅れて済まぬな」

「メイはどうした？」

振り返らずに、ジエツトは隣にいるふたりに聞く。

「言わずとも、知れておるじゃろう」

「そうか。実の姉がああなったんじゃ、どうしようもねえ。それは

そつと、シリスは無事なのか？」

「ミイヴとジェットが話している横で。」

「あ」

「アイリスが後ろを振り返り、燃え盛る船を指差した。」

「そこから誰かが、海へと落ちる。」

「シリスカ！ 今すぐに拾ってやるぞ」

「ミイヴが浮遊石のロッドを握り締め、駆け寄ろうとするも。」

「僕はいい！ ミイヴ、上から来るよ！」

「シリスは海から顔を出し、大声でそれを制した。」

「同時に、敵が来ることを知らせる。」

「なに？」

「ミイヴ、アイリス、ジェットは目を疑った。」

「燃え盛る船から、耳から生えた翼で羽ばたく少年が現れたからだ。」

「グガアアアアアアアアアア」

「な、あいつぁ」

「か、カロス……じゃと？」

「声を出せたのは、ジェットにミイヴのみ。アイリスは両手で口を押さえている。」

「真紅の鱗に覆われて半分は隠れていたが、その顔は間違いなくカロスのものだった。」

「彼は尻尾と翼で姿勢制御している。」

「その手や破れた靴からは、血のように赤い爪が伸びていた。」

「炎鎧だと？ く、あの島での竜人と同じことをしてやがるな」

「分析しておる場合か？ なぜ、なぜこんなことが……」

「舌なめずりをして、獲物を探しているカロス。」

「か、カロス君っ？」

「メイは船から降りて、ミイヴの傍にやってきていた。」

「上にいるカロスをおおぎ見て、メイは叶うはずのなかった再会に歓喜している。」

「ガウツ？」

「カロス君。ねえ、わたしだよ。メイだよ」

手を胸に当てて、涙ながらに微笑み、カロスに声をかけるメイ。しかし、目の前にいるカロスに言葉など通じなかった。

「ダメじゃ。メイ、伏せろお！」

「きゃっ」

ミイヴはアイリスとメイの頭をつかみ、強引に伏せさせた。

間一髪。カロスの足の爪撃は外れ、三人の頭上を通過するだけで済んだ。

「野郎。何しやがんだ！」

ジェットは背中の大剣で斬りかかろうとするも、メイが身体を張ってそれを阻止する。

「どけえ！ こいつらはもう、お前の知っている人間じゃないんだ」

「それでも、それでもっ。もしかしたら、正気を取り戻してくれるかも……」

「そんな淡い期待なんか持つな。やらなくちゃ、こつちがやられるんだぞ！」

ジェットはアイリスを、ミイヴはメイを連れて、港から離れた。

カロスは四人に目もくれず、空中で深呼吸している。

「グギャアアアアアッ！」

カロスは口から火球を吐いて、残っていた船を撃沈させた。

「く。鳥はいるし、竜もいやがる。こいつぁ、しちめんどくせえな」
ジェットはネイとカロス、どちらを先に討つべきか考える。

メイの存在が、ジェットの決断を鈍らせた。

「カロス君。どうして」

「もはやあやつらはネイでもカロスでもない。メイ、覚悟を決めろ！」

ミイヴが肩をつかんで訴えても、メイは首を縦には振らない。

「このままでは、ふたりは浮かばれぬ。ワシらで弔むさうしかないのじや」

「や、やだ。なんで、なんで？ お姉ちゃんにカロス君は……どう

しちゃったの？」

泣いて、へたばってしまふメイ。

何が起きたのか理解できず、頭を抱えて混乱している。

ミイヴもまた、迷いを捨てきれずにいた。

「これは、悪夢なのっ？」

「紛れもねえ現実だ。済まないが、オレはあっちへ向かう。このままじゃ、全滅だ」

ジェットは羽根帽子をアイリスの頭に被せて、ネイのほうへと走っていった。

「ふはあ。ミイヴ、僕らでカロスを押さえよう」

自力で海から這い上がり、シリスは三人の近くにやってきた。

びしょぬれの前髪を後ろへどかし、おもむろに立ち上がる。

「シリスか。お前は、メイを連れて逃げる。ワシはカロスをどうにか押さえてみせる」

ミイヴがロッドを構えて、シリスが上を見ようとした瞬間。

「「な」」

「え？」

「きゃ」

シリスとミイヴは驚き、アイリスは目を疑い、メイは何者かにさらわれた。

「だ、だれっ？ あなたは……」

「ふふっ。愛する者の腕に抱かれて、逝くといいさ」

メイを片手で担いでいる少女は、ゴミを捨てるかのように彼女を放り投げた。

「え……あ」

カロスは目の前にある獲物に歓喜し、メイの肩に噛みついた。

「きゃああああああああああああああああっっ！？」

あまりの激痛に、メイは泣き叫んだ。

「い、いた。や、やめてよ。カロス君……っ」

空中でメイに抱きついて、彼女の血肉をむさぼるカロス。その手足の爪はメイの身体を貫き、赤く熱い血を滴らせる。

「だ、ダメだよ。あ、ああ……」

アイリスはメイを助けようと手を伸ばす。しかし、その手と想いは届かない。

「く、今すぐに助けて　ぬあっ！」

「きゃっ」

ミイヴとアイリスは、突如起きた地震で転んでしまった。

それは、幼女が地面を強く踏み込んで起こしたものだ。

「う、ああ」

もうダメだと悟ったメイは、血を吐きながらカロスの頬に手を添えて。

「んん……」

キスを、した。

「な、くそ。誰じゃ、貴様はあ！」

ミイヴはロッドの先端を幼女へと向ける。

「フィアリウ」

その隣にいるシリスが、幼女の名を口走った。

「な、なに？　あやつを知っておるのか。シリス」

「あ、ぐ……う」

アイリス、シリス、ミイヴの間に。

血みどろで事切れた、メイが落ちてきた。

「く。か、カロスう！　貴様は、メイを殺して何とも思わんのかあ
!？」

それを見て、激昂するミイヴ。

しかし、カロスは無反応だった。

「む？」

幼女は背後からの斬撃に気づいて、残像をちらつかせて跳ぶ。邪魔だと言わんばかりに、眼前のカロスを蹴り落とした。

「グガゲエエエツ！？」

海に落ちたカロス、水が苦手なのか溺れている。

「ちっ。どうも竜と合わせたのは、制御がうまくいかない」

フィアリウと呼ばれた幼女は、メイの脇に着地した。

「お前、よくもやりやがったな」

メイを殺されて、怒り狂っているジエツト。

孤島で出会った幼女の力を知っているため、深追いはしない。

「アル おっと。今の君の名は、ジエツトだったね」

斬りかかったのが誰なのかを目視し、フィアリウはカロスへと手をかざす。

「テメエ。どうしてそれを知ってやがる」

「ふん。まあそれはいいさ。ボクが確かめたいのは、双子の絆なんだよ」

フィアリウはカロス、一枚のカードにして回収した。

ほたるのような光が、その軌道に残される。

「な、なんだ？ テメエ、いったい何を」

「よそ見してる場合かい？」

それをキャッチした後、フィアリウは短パンのポケットから一枚のカードを取り出し、それをメイの身体に突き刺した。

「さあ、生まれるがいい。美怪鳥のユイフェヴ、メイよ」

「ユイフェヴ？」

アイリス、ジエツト、ミイヴは同時につぶやいた。

妖しい輝きに包まれるメイ。

そして、光の中から生まれ出た彼女は

「クツキヤキヤキヤッ！」

姉のネイと同じように、メイもまた鳥人化していた。

「さあ、一暴れするといいいい」

「クケケケケッ」

フィアリウはメイを、手始めにジエツトへけしかけた。

その間にフィアリウは家屋の屋根上へ跳び、この場から姿を消す。

「な、なに？」

メイは飛翔して、その手の爪でジェットに襲いかかる。

「く。ま、マジかよ」

爪撃を後退してかわしたジェットは、背後からもうひとり来たと直感し、屈んだ。

「キエエエエッ」

「ち。姉妹だけあって、息が合ってるな」

頭上を通過する足の爪を見て、冷や汗をかくジェット。

「ネイを相手にしていた魔道士は、もう半分も……」

ミイヴの言うように、ネイと対峙していた魔道士は半数が殺害されていた。

そのほとんどが、身を切り裂かれている。

「く。もはや、もはや生け捕りなどと生温いことは言わん！ 止むをえん。ネイとメイの双子の姉妹を、始末するしかあるまい」

「そ、そんな……」

ミイヴの言葉に、絶望するアイリス。

ジェットもまた、そうするしかないと腹を括くった。

「ミヴの言う通りです。アイリス、ジェット。ふたりも、僕らに手を貸してください」

「わくったよ」

「生き残った者は、町や海に生存者がいないか確認してくれ。あのふたりは僕らが押さえる」

「わ、分かりました」

生存した魔道士達はシリスの指示を受け、足早にこの場から立ち去る。

黒曜石のロッドを右手に握って、シリスは背中を合わせて停空するふたりを見据えた。

「そんな。メイとそのお姉さんを、どうして倒さなくちゃいけない

の？」

ただひとり、アイリスは戦意を失っていた。

膝について、恐怖と混乱に心を乱されている。

「アイリス。もうあれは、人間じゃない。もうオレらの知っているメイじゃないんだ」

「でも、でもっ」

「割り切れ！ さもないと、こっちがやられるんだぞ」

「

ジエツトは複雑そうな顔をして、ネイとメイの姉妹を見つめる。言いようのない想いにさいなまれ、アイリスは涙するしかない。

「アイリス。メイはついさっき、カロスに殺されたのじゃ。今はその亡骸を利用され、魂を汚されておる。ワシらにできることは、あのふたりを倒し、成仏させてやるほかない」

「そ、そんなの……っ」

アイリスは頭を抱えて、嗚咽おえつした。

これが、夢であると祈っている。覚める夢だと、頑かたくなに信じている。

「く。ミイヴ。お前はアイリスを連れて、さっきの魔道士達を追える。」

「し、しかし」

ジエツトの言動に驚くミイヴ。

シリスが静かにうなづいたのを見て、その目を白黒させる。

「ここはオレとこのガキひとりで何とかするさ。いいから、さっさと行きやがれ。ここにいても邪魔なだけだ！」

左右に首を振り、ミイヴはアイリスの手を引く。

「アイリス。く、ならば」

浮遊石の力でアイリスを浮かせて、ミイヴは彼女と一緒にここを走り去った。

「これで、思う存分にやれますね」

「ん？ シリス。お前、何を言ってた？」

不敵な笑みを浮かべて、シリスは黒曜石のロッドで自分の右肩を叩いた。

「ケケケツ」

「キヤキヤキヤツ」

ジェットとシリスはたがいに距離を詰める。

「僕が援護します。ジェットは、ふたりに引導を渡してください」

「テメエ。オレがどういう心境でいるのか、解ってて言ってねえか？」

ふたりの動きを注視しながら、シリスとジェットは打ち合わせする。

「解りますよ。黒月鳥として、鳥類は屠りたくない。ネイとメイの姉妹もできれば殺したくない。二重苦なのは承知の上です。僕も、できうるならふたりは……でももう、手遅れなんです。そう割り切るしかありません」

「非情だな。けど、その考えには賛同だ。オレもあのふたりを、歪んだままで放置はできない」

大剣をいつでも抜ける体勢を取って、ジェットは腰を落とした。

シリスは溜息をついて、ジェットの背後に位置する。

「ねえねえ、お姉ちゃん。あいつら、どうぶつ殺そつかあ？」

「ふふ。そうねえ。風でさあ、細切れにしちゃう？」

「きやははは。それ、おつもしろい」

メイがもうメイでないことを確信して、ジェットとシリスは腹を決めた。

「ダーク・リチュアル 暗黒の儀式」

シリスは町に転がる死体から黒マナをかき集める。

「とりゃああああああああああっ」

ジェットはネイへと斬りかかるが、ふたりは分かれて飛翔し、その斬撃から逃れた。

「ちっ。向こうはスピードがあるな」

刀身を蹴り上げて、素早く納刀するジェット。

「なら、遅くしてあげましょう。“グラビティ”」

呪文を省いて、シリスは一帯の重力が増す魔法を唱えた。

「クケッ？」

「キイツ？」

ネイとメイのふたりを地上に落として、シリスは魔法を解除した。
「助かるぜ」

その隙に、ジェットはふたりに接近する。

「クキヤアアッ！」

飛び立とうとしたネイを大剣で叩き落とし、ジェットは彼女を串刺しにしようとする。

が、その直前で刃が止まってしまった。

「ジェット。何をまよ　ぐわ！」

背後からメイに襲われたシリス。

右肩を爪でやられ、ロッドを落としそうになった。

「クケケケケッ」

「ちっ」

ネイに逃げられたジェットは、シリスを横目で見て、手を立てて詫げる。

「済まない。迷っちゃった」

「そう、ですか。今度は、そうなたらやられますよ」

「だな。もうあれこれ迷っている暇はない。いや、なさそうだ」

大剣を地面のレンガに斜めに突き刺して、ジェットはその柄を両手で握り締めた。

「な、なにを」

「シリスの援護あって攻撃が届くんじゃ、話にならない。それに、奥の手を隠している場合じゃなさそうだ」

ジェットはネイとメイのふたりを見据え、低空飛行するのを待った。

「ねえ、やっぱりこれでバラバラにしちゃおうよ」

「そうだね。それがいいね。お姉ちゃん」

爪撃なら、地上にいるこちらに高度を合わせてくる。

それを待ち侘びていたジェットは、近づいてきたネイへと 神速の抜刀を放った。

「ッ、アアア……」

ネイの下腹部を走る、月明かりを浴びて艶やかに輝く黒刃。

返り血を浴びることなく、ジェットは擦れ違いざまにネイを斬り捨てた。

「お、お姉ちゃん？ お姉ちゃんっ！」

ん？ やけにねばつくな、この血は。

ジェットは刀を振り、刀身に流れる血を払った。

「まさか、その大剣は……」

「鞘だ。オレの本命は、こっちなんだよ」

黒羽の大剣から抜かれた、漆黒の一振り。

倒れたネイを揺さぶるメイを振り返り、ジェットはこう言い放った。

「悪い。手が滑ったらしい」

その言葉の意味を、即座に察したシリス。

「あ、よかった。お姉ちゃん」

「キ、キイヤアアアアアアッ！」

怒り狂うネイは、金切り声を上げて飛び起きる。

そして、先刻斬りつけたジェットをにらみつけた。

「ハーピー同様につるせえな。おっと、そっぴやお前らは美怪鳥のうんたらだったか」

「ユイフェヴですよ」

低い声で、そう付け足すシリス。

「そう、それだ。そのユイフェヴってのは何なんだ？」

「こついうことですよ」

ネイとメイを間に挟んで、ふたりは言葉を交わす。

「な」

ジェットは目を疑った。

なぜなら、シリスの耳から黒い竜の翼が生えていたからだ。

その頃、アイリスとミィヴは。

「な、なんじゃと」

「ひっ」

惨状を目の当たりにして、ふたりは手で口を塞いだ。

ついさっきまで生きていた魔道士が全員、血みどろで倒れていた。

「おや、遅かったね」

その血だまりを挟んで、ひとりの女性とフィアリウが対峙していた。

「き、貴様は……レイエル。な、なんじゃ？ その髪と瞳は」

長い遊色の髪を振り乱し、切れ長で鋭い虹の目を持つ女性。

その女性がまとう白の外套は、黒く変色した血が付着していた。

「わ。わたしとおんなじだ」

「同じ？ あら、そこにも虹がいたのね」

アイリスは自分と同じ髪と瞳を持つ女性を見て、まばたきを繰り返している。

女性は横目でそれを視認するも、眼前のフィアリウに集中していた。

「同じなものか。アイリスとレイエルは、天と地ほど違う。あの女には、優しさなど皆無」

「アイリス？」

ミィヴの言葉に、レイエルと呼ばれた女性は目を見開く。

その隣にいるアイリスをじっと凝視し、納得したのかうなづいている。

「なるほど。やっぱりあなたが、孤島ノーシアにとらわれていた虹なのね。ふむふむ」

「何を納得しておる？ 同士を屠ったことを、ワシが後悔させてやるろう。レイエル！」

ロツドの先端をレイエルへと向けるミイヴ。

「ね、ねえ。あの人、レイエルっていうの？」

「？ その外套と帽子は、どこかで……」

アイリスが身につけているものを見て、レイエルは懐かしさを覚ええた。

「か、顔色が悪いよ？ ねえ、休んだほうがいいんじゃない？」

「あたしよりも、自分の心配をなさい」

アイリスの言うように、レイエルの顔は真っ青だった。

冷や汗をかいて、呼吸も荒れている。

「アイリス、こやつも敵じゃ！ 情けなど無用」

「で、でも」

「悪いけど、あたしはあなた達には用はないのよ。用があるのは、そこにいる幼女のみ」

ミイヴとアイリスに目もくれず、レイエルは目の前にいるフィアリウを指差した。

「おや、レイエル。だいじょうぶかい？」

「あなたに心配されるなんて、あたしも焼きが回ったわね」

手に持つハンカチで額の汗をぬぐい、レイエルはフィアリウをにらむ。

前髪を手でかき上げた時、レイエルの背後から細長いものが襲いかかった。

「こんのおおおおっ」

「な」

レイエルの左腕に噛みついたのは、白蛇しろへびだった。

「ろ、ロウスケラア？ トルミエはあ様の、使い魔ではないか」

「よくも、よくもトルミエちゃまをおおおおおおおっ」

「な、なんじゃ……と」

白蛇の発言に、愕然がくぜんとするミイヴ。

「トルミエはあ様を、レイエルが……馬鹿なああっ！」

逆上したミイヴはレイエルへ殴りかかる。

レイエルはそのロッドを、かわすことなく腹に受けた。
「うっ」

片膝をついて、お腹を押さえたレイエル。

「み、ミヴ」

「な、放せえっ！ 真まことか？ ロウス。本当に、ばあ様を……」

アイリスに羽交い絞めにされて、ミイヴは激しく抵抗する。

「い、た」

「ぬ。あ、アイリス……す、済まぬ。取り乱してしもうた」

アイリスの左頬を肘で打ってしまい、ミイヴは冷静になる。

「ぬぐゃ」

レイエルは白蛇を振り払い、皆に構わずフィアリウを見据えた。

「ええ。そうよ。あたしはトルミエ院長を屠殺とくつした」

「な、く」

「憎いでしよう？ ミイヴ。あなたにとってあのババアは母親も同然。あたしを殺したいでしょう？ だったらそうすればいいのよ」

「そ、そのような安っぽい挑発になど……」

ミイヴはアイリスから離れて、レイエルとフィアリウを交互に見やる。

歯を食い縛り、ミイヴはたぎる怒りを必死に抑えていた。

「ふん。トルミエが死んで、一番悲しんでいるのは君だろう？ レ

イエル」

「……っ」

「な、何を言っておる。貴様は」

「さあ？」

肩をすくめて、フィアリウはポケットから二枚のカードを取り出し、それを解き放った。

「行け。三人を殺すんだ。業火竜いかりつうりゅうのユイフェヴ、カロス。閃光羽せいたつはねの

ユイフェヴ、ゼネフ」

その直後、フィアリウは跳躍へびりゅうし、屋根上で高みの見物を決め込んだ。

「ガグガアアアアアアアッ」

「ぬうあああああッ」

三人の眼前に召喚されたのは。

皮膚が赤い竜鱗りゅうりんで覆われた、炎の鎧を身にまとう竜人。カロス。光り輝く虫の羽が耳から生えた、全身白づくめの服の老人。

「あ、おじいちゃん。ゼネフおじいちゃん!」

「な、どうしておじいちゃんが……」

アイリスの叫び声と、レイエルのつぶやきは同時だった。

「な、なに? レイエル、貴様は何を……」

ふたりの発言に耳を疑っていたミイヴだが、その回答はフィアリウが言った。

「ふふ。ゼネフとトルミエはね、そこにいるレイエルの祖父母なんだよ」

「な、なんじゃとっ?」

フィアリウに暴露ばくろされ、齒噛みするレイエル。

アイリスとミイヴは、その事実を知って目を丸くした。

「そ、そのような戯言たわごとを」

左右に首を振って、それが虚偽だと思い込むミイヴ。

アイリスは呼吸を乱したレイエルに、手から紡いだ癒しの光を当てていた。

「な、何をしてるの」

「だって、苦しそうだから……」

「な、情けなんてかけないで。今は、休戦といきましょう。いいわね? ミイヴ」

ゆっくりと立ち上がるレイエルをにらみながら、ミイヴはロッドの先端をカロスへと向けた。

「ふん。こやつらを倒したら、次は貴様の番じゃ」

一方、ジェットとシリスのふたりは。

それを姿勢を低くしてかわし、ジェットは柄の先端でネイの腹を叩き、動きを止めた。

「ガ、グガアアアツ」

その隙にネイの首をつかんで、ジェットは。

「このまま爪を立てて、息の根を止めてやんよ」

とした矢先、風の刃がジェットへと飛来する。

「っ」

予期せぬ攻撃に手を放してしまうジェット。

それは頭上を通り過ぎた。

「メイか」

追撃を恐れて、ジェットはシリスのいるほうへ後退した。

「すいません。呪文の詠唱をせずに、メイを押さえていれば」

「謝んな。それを言うなら、しゃべらずにさっさとどめ刺さなかつたオレが悪い」

「そうですね」

「言ってくれんな」

ネイとメイは、傷をつけられたことに激怒している。

ジェットとシリスは、ふたりが姉妹であることを再認識した。

「もう我慢できないよ。あいつら、さっさと殺しちゃお」

「そうだね。お姉ちゃん」

大きな穴の上を飛ぶ姉妹は、背中を合わせて耳の翼をはためかせる。

「なに？」

接近しようとしたジェットは、その周囲に竜巻が発生していることに気づく。

「これじゃ、近寄れないな」

「なら、僕がどうにかします。“シエイド”」

竜巻の内側にある、ネイとメイの影。

そこから無数の細長い影針を伸ばしてみるが。

「クケケケケツ」

「きつかないよ〜ん」

ふたりにあつかんべをされて、その攻撃魔法は風に打ち消されてしまった。

「浮上したことで、影の針が竜巻に払われてしまいましたね」

「ちつと遅かったな」

ネイとメイの姉妹は竜巻に守られて、その中で呪文を詠唱している。

ジェットは左手で帽子を押さえ、シリスは耳を澄ませている。

「どうやら、最大威力で魔法を放つみたいですね。長々と口ずさんでますし」

「冷静に分析してないで、対応策はあるのか？」

「ありません」

「さっきの高威力の魔法をぶち込むのは？」

「有効でしょう。けど、ほとんどの威力が竜巻に相殺されますね。

そよ風ぐらいじゃ、ふたりの詠唱を止められません」

「じゃあ、ここは」

「逃げるが勝ち、ですね」

ふたりは同時にうなづいて、姉妹から距離を取った。

その際、ジェットは大剣に見立てた鞘を拾い、それに刀を収める。

「おや、回収するんですか」

「一応、盾にはなるんでね」

「なるほど」

港に戻ったジェットとシリスは、海を背にして姉妹を注視する。

「危なくなったら海に潜れ。相手が鳥で風使いなら、水は堅固な盾になる。向こうの風が水を巻き込むほどの威力がなければ、の話になるかな」

「そうですね。けど、ジェットは水を盾にするつもりはないんですよっ？」

「だな。鳥は羽根がぬれると、動きが鈍るし飛べなくなる。シリスひとりに任せるのは酷だからな」

大剣を前に構えて、ジェットはシリスを庇う態勢を取る。

「僕が威力を相殺します。ジェットは、その隙にふたりに切り込んでください」

「あいよ」

ジェットは姿勢を低くして、踏ん張れる体勢になった。

シリスは小声で呪文を詠唱し、いざという時のために集中する。

「さあ、これでぶっ飛んじゃえ！」

「お姉ちゃんの力を借りるよ。ゆっけえ！ “烈風の神槍”」

ビッグ・トルネイド

姉妹は魔法を解き放ち、ジェットとシリスに向けて巨大な竜巻を差し向けた。

「来たぜ」

「ええ。“プレッシャ”」

シリスがロッドを掲げて唱えた魔法は、両者の間に黒い球体を出現させた。

それはうなりをあげて、静かに周りの空間を歪ませる。

「な、なんだ？」

「ジェット。あれがあるうちは踏み込まないで！」

シリスはロッドの先端にある黒曜石を両手でつかみ、重力を制御して、姉妹が放った竜巻を分散させる。

「え、うそっ？」

「だったら、出力さいだあいつ！」

姉妹が放った竜巻は予想以上に強く、重力球を貫通してふたりに襲いかかる。

「な、マジか　ぬぐあああああつ！」

「くそつ。　うわあああああつ」

竜巻に吹っ飛ばされたふたりは、燃え盛って沈みかけている船に激突し、その中を派手に転がされる。

「ち、ちくしょ」

「げほっ」

受け身を取り、体勢を立て直すジェット。

シリスは当たりどころが悪かったのか、頭から血を流している。
「だ、だいじょうぶか？」

手を差し伸べるジェット。

「え、ええ。けど、軽くめまいが……」

横になつたままで、シリスは返事をする。

「脳しんとうだ。少し休んでいたほうがいい」

ふたりのいる船が、急に揺れ動いた。

「浸水か？ カロスから火種をもらつといて、よく持ってるな。確かこれ、シリスが乗ってたやつだよな」

「言ってる場合じゃないでしょう。早く脱出しないと、船もろとも海のもくずです」

「そうだな。よつと」

大剣を背負い、それからジェットはシリスを抱え上げる。

「な、なにを」

「照れてる場合か？ おつと、オレらが突っ込んだところから水が入ってるのか。上を目指すしかないな」

船の揺れを踊るようなステップで吸収し、階段のほうへと走り始めるジェット。

「追撃はなさそうだな。あいつらがオレらを見失っている間に、あの姉妹のどちらかに奇襲をかけるしかない」

「奇襲、ですか」

「何か案はあるのか？」

階段を上りながら、ジェットはシリスに訊ねる。

「あるにはありますが、確実とは言えませんね」

「なんだ？」

「さっきのはふたりで成り立つ連携魔法でしょう。となれば」

「ひとり、断てばいい」

「ええ。ですが」

「まだ何かあるのか？」

「姉妹のうちで、弱いのはおそらく」

「メイだろつな。任せる。お前の手は汚させやしない」
「ジェット、が？」

「やる。メイも、あんな姿のまま生きていたくはないだろう。カ
ロスとともに、送り出してやらないといけない」

「……っ」

船内から甲板に出たふたり。

「あれえ？ まだ生きてるよ。おお〜い、お姉ちゃ〜ん」

上を見ると、そこには飛んでいるメイがひとり。しかもよそ見を
している。

それを好機と見たジェットはシリスを投げ捨てた。

一瞬生じた迷いを払いのけ、背中にある大剣から直接、刀を引き
抜く。

「え……あ」

飛びながらの神速の剣閃は、空中にいるメイを斬り落とした。

「あてて。ら、乱暴ですね」

「メイ。お前と一緒に過ごした時間は、ほんとに楽しかったぜ」

軽やかに着地して、ジェットはメイに背を向けながらそう吐き捨
てた。

「あ、……ぐう」

まだ息のあるメイは、信じられないといった眼差しでジェットを
にらむ。

その胴体は黒刃によって引き裂かれており、そこから流れる血は
どす黒く、凝固がもう始まっている。

「ん？ その血は……まさか」

黒い血を目の当たりにして、ジェットはフィアリウが何をしたの
か理解した。

「アンデッド化だと？ 死んだ血で肉体を動かすなんざ、それぐら
いしか」

「ジェットお！」

シリスは黒曜石のロッドを上投げた。

「クギヤアアツ!?!」

それは急降下していたネイに命中し、落下の軌道をそらすことに成功した。

肝を冷やしたジェットは、シリスへと親指を立てる。

「た、助かった。あんがとな、シリス」

「礼はいいですよ。後は、ネイだけです」

「メイはまだ、抗^{あいつが}ってるようだがな」

「飛べない鳥など、脅威ではありません」

ネイは甲板から船内に突っ込んだらしく、まだ出てこない。

「どうやら、早く逃げたほうがよさそうだぞ」

「ええ」

ジェットはシリスの手を引いて、船から飛び立った。

「クギヤアアアアアアアアアアツ!」

船体から飛び出し、後ろから追ってくるネイ。

「な、くそ。地に足がつかないと」

港に降り立つ前に襲われて、ジェットは焦る。

「ち」

くしよう。ネイの鋭い爪が、眼前に迫っている。

もうダメだ。そう思って目をつむろうとしたら、ネイが誰かに捕らえられた。

「お、おねえ……ちゃん」

それは、メイだった。

メイはネイを羽交い絞めにし、空中でどうにか押さえ込んでいる。

「ジェットさん。わたしが、わたしが……正気を保っている間に、早くとどめを!」

「な、なにっ?」

「お、おねが……い、します。あたまが、あたまがいたいんですっ!」

着地したジェットはシリスから離れて、必死で泣き叫ぶメイを見上げた。

「……………解った」

左手で帽子に 触れようとして、アイリスに預けたことを思い出すジェット。

背中の大剣を地面に落として、刀を両手で握り、正眼に構える。

「メイ。何か言い残すことがあるんなら、今のうちに言え」

「え、へへ。そう、ですね。ジェットさん、あなたのことが……好きでした」

「けっ」

飛び立って、擦れ違いざまに。

「あ、りがと……」

「オレも、お前のことは嫌いじゃなかったぜ」

ジェットは、ネイとメイの姉妹を一刀両断にした。

「泣いているんですか？ ジェット」

「ふっ。目にゴミが入っただけだ」

指で目をこすり、それからネイとメイの亡骸を見下ろすふたり。

「シリス。ユイフェヴとは、なんだ？」

深呼吸して気持ちを落ち着けた後、ジェットはシリスに問いかけた。

「フィアリウいわく、人間と動物の高度融合体。僕のように、生きたままの状態の人間と動物をかけ合わせれば正気を保っていられる。しかし、フィアリウはメイをカロスに殺させてからハルピユイアと合わせた。そこに何か意図があると思います」

横目でシリスを確認し、あることを思い出したジェット。

「意図、か。双子の絆がどうか言ってたが、まあいい。本人に直接問いただせばいいんだ」

言いながら、ジェットは海のほうに目を凝らす。

「あれか」

背中の翼で羽ばたいて、ジェットは海面に浮かんでいるロッドを

拾い上げる。

「ほらよ」

「あ、ありがとうございます」

ジェットが投げた黒曜石のロッドをキャッチし、シリスは安堵する。

「もうひとつ。フィアリウは何者だ^{なにもの}」

「う、げほっ」

シリスは突然咳き込んだ。

「おいおい。どうした」

心配になって、シリスの下へ降り立つジェット。

「な、なんでもないですよ」

「血を吐いて、なんでもねえってのはいただけじゃないな。そこまで正体さらしたんだ。隠す必要はないだろう」

「ふふっ。そうですね。実は、僕も長くないんですよ」

も？

ジェットはシリスが無意識に言ったことに引っかけた。

「薬を飲んで、ようやく発作を抑えていたんですが……さすがに、身体が持たないようです」

片膝をついて、シリスは短パンのポケットから小瓶^{こびん}を取り出す。

その中には、錠剤がいくつか入っていた。

「お前。それをミイヴには」

「言いませんよ。言ったら、彼女が心配するじゃないですか」

微笑んで、強がってみせるシリス。

「さっきの質問ですが、僕もフィアリウについては知らないんですよ。ユイフェヴの創造者と異邦人であること以外はね」

「創造者に、異邦人だと？　ったく、意味が解んねえな」

「ええ。でも、彼女は優しい人ですよ」

「ここまでやっておいて、優しいだと？　けっ」

舌打ちをして、ジェットは大剣の鞘に刀を収め、それを背負う。

「ま、んなこたあどうでもいいや」

手を振りながら、ジェットは港のほうへ歩いていく。

「ジェット。そっちではありませんよ」

「ふん。オレはもう、戦を強いられるのはごめんだ。空しさしか残らないような戦なんて」

「に、逃げる、つもりですか」

「その何が悪い？」

振り返ったジェットは、冷たい眼差しでシリスを見つめた。

「幸い、お前は満足に動けないみたいだからな。もうすぐ夜が明けるとし、立ち去るにや今が好機だ」

「あ、あなたは……また、逃げるんですか」

「また？ どういう意味だ」

「そうやって、つらいことばかりから　ごぼっ、げほん」

咳き込みながらも、シリスは鬼気迫る形相でジェットをにらんだ。

「あなたは、逃げてばかりの卑怯者だ」

「なんだと？ 言葉に気をつけるよ。今すぐにテメエをぶっ殺すこともできるんだ」

「やりたければ、勝手にやればいい。こんな死に損ない、殺したところで自慢にもならないでしょう」

「……………」

「もう、もう逃げないでください。そんなことしたって、失うしかないとあなたも解っているでしょう？」

「ん？ お前、まさか」

「き、気づき……ましたか」

ジェットはシリスの異変に気がついた。

「右目が、見えてないのか」

「はは。付け足すなら、さっきから右耳も聞こえてませんよ」

「そんな状態で、魔法なんか唱えてやがったのか」

溜息をつき、ジェットはシリスに歩み寄る。

「同情なんかいいです。ジェット。早く、早く、姉さんのところへ」
「ねえさん？」

「グガアアアツ！」

カロスの手の爪撃を、後退してかわす三人。

「く」

「邪魔だ。どけえ！」

レイエルを押しつけて、ミィヴは前進しながらカロスへ黒い球体を叩き込む。

「グゴアアアアツ！？」

その直撃を受けて吹き飛び、家屋に激突するカロス。

ロッドから発現をしたミィヴは、レイエルをにらんでからカロスに向き直った。

「バラバラだね。協力しないと、このふたりには勝てないよ」

屋根上からヤジを飛ばすフィアリウ。

腰を下ろして、退屈そうにあくびをしている。

「ふん。死んでも、ばあ様に手をかけたレイエルなどに手を貸すものか」

意地を張るミィヴ。

「だいじょうぶですか？」

アイリスはレイエルがゼネフの孫だと聞いて、親近感を抱いていた。

「あたしはいいわ。それより、ミィヴを冷静にさせなさい。あのままでは……」

「は、はい」

うんとうなづいて、アイリスはミィヴのほうへ歩み寄る。

「ミィヴ」

「なんじゃ、アイリス！」

レイエルを気遣うアイリスが許せないのか、ミィヴは怒りを露にする。

「そ、そう怒らないでよっ」

なだめようとするも、ミイヴににらまれてしまつアイリス。

「ここはワシひとりでやる！ 貴様らは邪魔じゃ」

そう言い放つて、ミイヴはロッドを構えて呪文を唱える。

「アイリス。儂^{わし}じゃよ」

「え、お、おじいちゃん？」

アイリスはその呼びかけに安堵し、白く発光するゼネフへ歩み寄る。

「っ」

レイエルは何かを察して、ハンカチからナイフを取り出し、それをゼネフへ投擲^{とうてき}した。

「何をするのじゃ。レイエル」

「やはり、あなたはおじいちゃんじゃないわね」

「え？」

戸惑うアイリス。

ゼネフの胴体にナイフが刺さっている。

その傷跡からは、どす黒い血が少しずつにじみ出てきた。

「う、うそ」

「アイリス！」

レイエルは手を伸ばすが、アイリスはゼネフの手に捕まってしまう。

「や、やめて。痛いよ、おじいちゃんっ」

「さあ、儂^{わし}とともに逝^いこう。“フォトン”」

「きやああああああ」

至近距離で光線を浴びて、吹っ飛ばされてしまふアイリス。

レイエルはアイリスを受け止めるも、その衝撃で尻もちをついてしまった。

「だ、だいじょうぶ？」

「は、はい」

レイエルはアイリスを離して、ゼネフと向き合った。

「おじいちゃんは、平気でこんなことする人じゃないわ」

「そうだったかのう」

「フィアリウ！ おじいちゃんをこんなにして、あたしはあなたを絶対に許さないわ！」

屋根上で傍観していたフィアリウは、ミイヴに目を向けた。

「く」

「ツガウガアアアッ！」

カロスの腕力に圧倒されて、ミイヴはアイリス達の下へ離脱した。

「ミイヴ。彼は君を庇って亡くなったんだよ」

「な、何を今更」

カロスとゼネフに囲まれ、三人は万事休す。

「彼が死んだのは君のせいだ。その責任をどう取るんだい？」

「っ」

ミイヴはフィアリウを見上げ、唇を噛み締めた。

「ワシに、どうしろと言っのじゃ」

「ふっ。その答えをボクに聞いてどうするの？ 君自身が見出さなくちゃダメなんだよ」

「……………」

ゼネフは両手を合わせて、その中で白い球体を育む。

カロスは深呼吸をして、口から黒煙を噴き出している。

「まずい」

レイエルは血で汚れた白い外套を広げ、アイリスとミイヴをそれで覆い隠し、その場から転移した。

「わ」

「ぬ」

そのふたりは急なことに、何が起こったのか理解できなかった。

「危なかったわね」

カロスとゼネフが攻撃した場所は、大きな穴ができ、黒い焦げ目が残されている。

三人はそこから遠くに離れ、事無きを得ていた。

「ほう？ ふたりを連れて転移だなんて、素早いね」

「ファイアリウ。やらねっばなしのあたしじゃないのよ」

白い外套は燃えて灰となり、カロスとゼネフの周囲に舞い落ちる。

「ワシは……」

「ミイヴ。責任については後で考えなさい」

「だ、黙れ。貴様の指図は受けんぞ」

「あたしはね、トルミエと同士を殺した罪は地獄で償うわ。そうしてもいいと思えるぐらい、あたしには大切なものが見つかったの」

「仲間を犠牲にしてもいいほどのものじゃと？ ふざけるのも大概たいがいにせんか！」

未だに解り合えない、ミイヴとレイエル。

おろおろするアイリスは、不意にレンガの道路に手を置いた。

「ん？ な、なんだろ」

ふたりはアイリスの様子に気がついて、前方にいる敵を警戒しながら足下を見る。

しかし、そこには何もなかった。

「なんじゃ？ どうした、アイリス」

「あ、えつとね。何か声が聞こえるの」

ミイヴの問いに、アイリスは素直にそう答えた。

「声？ とにかく早くしてちょうだい。あのふたりは、あたしが押さえてみせるわ」

「ふん。貴様に守られるなど、ワシはごめんじゃ」

「ケンカするほど仲が良い？」

「「違っつ！」」

アイリスの一言に、同時に突っ込むミイヴとレイエル。

否定はされたけども、アイリスはそうだと納得した。

「うん。やってみるよ」

何かと会話するアイリスは、地面から溢れんばかりの光を紡ぎ出した。

「わわわっ」

びっくりして尻もちをつくアイリス。

ミイヴとレイエルは、これが何なのかすぐに察した。

「レイポイント？」

黄色の輝きが、地面から湧き上がっている。

「なに？ レイポイントを、自ら生成するだって？」

フィアリウは驚いて、屋根上から降りてきた。

「へえ。これはこれは」

近くでレイポイントを観察しようと、フィアリウは三人に接近する。

カロスは目の前に出たフィアリウを敵と認識したのか、爪で襲いかかった。

「ん？」

「ガグツ？」

カロスの爪撃は、フィアリウの頭を捉えていた。

しかし、その爪は触れた途端に折れてしまう。

「な」

「む」

「わ」

レイエルとミイヴとアイリスは、それを見て驚愕する。

「おや、誰を敵と見てるんだい。カロス」

カロスの攻撃に怒りを覚えたフィアリウは、三人に背を向けた。

「ロックランス」！

今を好機と見たレイエルは、地面から飛び出す岩石の槍をフィアリウへと走らせる。

「おっと」

「グガアアアッ！？」

「ぬおおおおっ」

フィアリウが跳んでかわしたことで、それはカロスとゼネフに命中した。

「お、おじいちゃん」

「アイリス。あれはゼネフおじいちゃんではないわ。もう、もう生

きていないの。あれを滅しないと、おじいちゃんは悪夢から覚めな
いわ」

「悪夢」

「そうよ。アンデッド化したまま放置していたら浮かばれない。倒
すしかないのよ」

「そ、そんなのって……」

「ないよ。」

アイリスは涙ながらに首を振り、目の前にある現実を否定しよう
とする。

「ふん。貴様ら虹は、破壊しか能がない。それしかできんのじゃろ
う？ さっさとやればよい」

レイエルとアイリスをにらんで、ミイヴは虹に対する鬱積^{うっせき}をぶち
まけた。

「み、ミイヴ」

「もはやその名で呼ばれるのも不快。やはり虹は虹じゃな。解り合
おうなどと思ったワシが馬鹿じゃった」

「な、なんで」

「昔から虹は、殺戮や破壊しかしてこんかった。アイリスは違うと
思いかけておったが、やはり何も変わらぬのじゃな」

悲しげな顔をして、ミイヴはふたりの前に出た。

「あたしは別に、好きで殺しや壊すことをしているつもりはないの
よ」

「ふん。何を今更。言いわけなど聞きとうない」

浮遊石のロッドを構えて、ミイヴは涙ながらに訴えた。

「ワシにとって大切なものは、ばあ様じゃった。貴様はそれを奪つ
ただぞ！ 孤児であったワシを、四才のワシを養子として引き取
って、育ててくれたトルミエばあ様を……どうして殺したあああ
っ!?!？」

胸で燃え立つ怒りを吐き出し、ミイヴはそれを魔法に込めた。

「まずはそなたらから葬^{ほつむ}ってやろう。“プレツシャ”」

呪文を省いて、ミイヴはロッドの先端から巨大な重力球を生み出した。

「へえ」

フィアリウはそれを見て、不敵に笑う。

「余裕じゃな。しかし、それもそこまで」

ミイヴはフィアリウへ向かって、その魔法を放った。

「さすがにそれは危ないね。だから」

「グガガアツ？」

「君が代わりに受けなよ。カロス」

フィアリウはカロスの首根っこをつかんだ。

そして彼を、迫りくる重力球へと投げた。

「な」

重力球は半ばでカロスに衝突し、爆発する。

「わわわっ」

「アイリスっ」

吹き飛ばされるアイリスを抱き締めて、レイエルは精一杯踏ん張る。

しかし、爆発の衝撃に耐えられず、地面から足が浮いてしまう。

「こっぴなったら」

姿勢を低くして踏ん張り、レイエルはミイヴのほうを注視する。

ミイヴは浮遊石の効力のおかげで、屈んでそれに耐えていた。

「カロスを、ぶつけるとは……」

フィアリウの言動に、ミイヴは恐怖した。

爆発が止み、その直撃を受けたカロスは。

「が、ぐ、ああ……」

全身を複雑骨折していた。それでもまだ、息がある。

「クズが。まだ生きているのかい？」

「な、止めるおー！」

ミイヴは叫ぶ。フィアリウは、その反応を見て笑っていた。

「どうして？ こいつはもう死んでいるんだ。再び殺すことが、ど

うして悪いんだい？」

「き、貴様あつ！」

ミィヴはその行いを許せず、走ってフィアリウへ接近する。

「ほつ」

両手を腰に置いて、カロスへ近づくとフィアリウ。

ミィヴはロッドを両手に握り締め、フィアリウへ殴りかかった。

「今、君の死亡フラグを立てるつもりはない。加減して叩くよ」

「ぐあああああああつ!？」

人差し指で腹を小突かれただけで、激しく地面を転がされるミィヴ。

「み、ミヴっ」

アイリスはレイエルから離れて、吹っ飛んできたミィヴを受け止めた。

「わ」

「もうっ。無茶をする子ね」

レイエルは新たに出した大きなハンカチで、ふたりをやんわりと受け止める。

「た、助かったあ」

「ぬ。ま、また余計なことを」

アイリスとミィヴは立ち上がり、ふと何かが気になって後ろを振り返った。

「え」

「な、なんじゃそれは」

「……………」

レイエルの耳からは、美しい虹の模様の、蝶の羽が生えていた。

「ヒーリング・スケイル
“治療鱗粉”」

レイエルはアイリスとミィヴを、その羽の鱗粉じんぷんで癒した。

「な、なんじゃ？ これは」

「すっつ」

「ここはあたしが引き受ける。あなた達は逃げなさい」

驚いているミィヴとアイリスをよそに、レイエルは腹を括った。

「え？」

「何を言うか。貴様はワシらをおとりにして、自分ひとりだけ逃げるつもりじゃろう？」

「いいから、ミィヴ！」

口づるさいミィヴを、レイエルは怒鳴りつけることで黙らせた。

「い、いきなり大声を出すでない。近いから響くぞ」

レイエルはアイリスをじっと見つめて、それからフィアリウを見定める。

「早く、あたしの娘を連れて逃げて」

ふたりの前に立ち、レイエルはそう告げた。

第4話

「ようやく君も、僕の求めていた希望の翼を具現化させたね」

耳から虹模様の蝶の羽を生やしたレイエルは、後ろにいるアイリスとミイヴを見やり、目だけで逃げると伝える。

「あなたが求めた翼が、ユイフェヴだとも？ ふざけてるわ」

「残るはゼネフだけか。まあ、何となく解ってるんだらう？ レイエル」

「……………」

無視されて、レイエルは腕を組むも。

何度も咳き込み、口から赤い血を滴らせる。

「だ、だいじょうぶ？」

「平気よ。アイリス」

レイエルはフィアリウを鋭い眼差しで射抜く。

その顔は青ざめており、冷や汗があちこちから吹き出ている。

ふと、何かを思い出したレイエルは、ジーンズのポケットから小瓶を取り出した。

「アイリス。これを持っていきなさい」

「え？」

「苦しくなったら、これを飲むのよ。いいわね？」

錠剤の入ったそれを、レイエルはアイリスに手渡した。

「何をしているの、ミイヴ。早くアイリスを連れて逃げなさい」

「ふん。貴様に敵前逃亡をすすめられて、素直にしたがうと思うか
そのやりとりを見て、フィアリウは肩をすくめた。

「美しい母娘愛だね」

「む？ 本当に、レイエルとアイリスは……………」

わけが解らず、ミイヴは混乱する。

一方、アイリスは皆の発言をようやく理解したらしく、小瓶をスカートのポケットにしまって、それからレイエルをじっと見つめる。

「この人が、わたしの……お母さん？」

唇を噛み締めて、レイエルはそっぽを向く。

「え、ほんとに？」

「ああ。それは事実だよ。なにっ？」

アイリスがフィアリウのほうを向いた時。

ふいと、彼女の背後にいたゼネフが、フィアリウを羽交い絞めにした。

「ミズハ！ 儂とともにこやつを撃ち抜けえっ！」

ゼネフの叫びに応えたのは、アイリスでもミイヴでもレイエルでもなかった。

「な、ぐ……ううっ」

「わりい。水を差しちまったな」

ジェットだった。

彼はその黒刀で、背後からフィアリウとゼネフを貫いている。

「急所を外したか」

「ぐ、やってくれるね」

左胸から少しずれている。

「ここで葬ってやんよ」

させまいと、フィアリウは黒刃を片手で押さえた。

ジェットは力を込めて、その手を引き裂こうとした　　が。

「な、なに？」

「いい加減にしろよ。ボクはまだ、死ねないんだ」

フィアリウはゼネフに押さえられたまま、ジェットに黒刀で貫かれたまま。

後ろにいるふたりを、片足で蹴飛ばした。

「ぐあっ」

「ぬほああっ」

ふたりを引き剥がした後、フィアリウは刺さっていた黒刀を引き抜く。

それをジェットのほうへ放り、フィアリウはレイエルをにらんだ。

「レイエル。どうして手を出さないんだい？」

「あなたには借りがあるもの。それにまだ、あなたから真意を聞いていない。そんな気持ち悪い状態で、あなたを殺すつもりはないわ」「せっかくのチャンスだったんだよ？ それを見逃すなんて、どうかしてるね」

おたがいに吐血しながら、ふたりは火花を散らしていた。

「く。ワシにもう少し……力があれば」

魔法を唱えた疲労があり、ミイヴは好機を見逃したことを齒噛みする。

ジェットは黒刀を拾い上げ、それからレイエルを見つけて声をかけた。

「よう。まだ生きてたのか、ミズハ」

「久しぶりね、アルセス」

「今はその名で呼ぶな。今のオレは、ジェットだ」

「そう。アイリスが身につけていた外套に帽子は、やはりあなたのものだったのね」

レイエルにあいさつしてすぐ、ジェットはフィアリウを見据えた。

「む？ ジェット、シリスは」

「あいつは港のほうで休んでいる。案ずるな。ネイとメイは、心惜しいが斬り伏せてきた」

ジェットはシリスが無事だと伝えてすぐ、黒刀を両手で構える。

「そんな……」

ネイとメイが死んだことを聞いて、アイリスは大粒の涙をこぼした。

ミイヴも、そんなアイリスを見て……悔しさに涙する。

「多勢に無勢か。まあいいだろう」

フィアリウは口から流れる血を手でぬぐって、ポケットに手を突っ込む。

「させないわ」

「ん？」

フィアリウの頭上を飛んでいたハンカチが、彼女の影にナイフを突き刺す。

足の動きを止められたフィアリウは、ちらりと月をあおぎ見た。

「影縫い……か」

「ええ。アルセス直伝よ」

レイエルの発言に、ジェットはほくそ笑んだ。

「そこにカードがあつて、ユイフェヴ化したトルミエがあるんでしよう？ 召喚などさせないわ」

「なかなか、読みがいいね」

レイエルはフィアリウの真正面に立ち、腕を組んだ。

「今すぐにあなたを殺してもいい。けどね、あなたの言動には謎が多い。それに、ユイフェヴについて一番詳しいのは……何より、あなただからね」

「尋問しんもんしようつてのかい？」

フィアリウは再び、ゼネフに羽交い絞めにされた。

「ミズハ。この娘に情けなど無用。儂は、儂とトルミエはお前にとんでもないことをしてしまった。そこにいるアイリスにも、謝らねばならない」

フィアリウを押さえ込んだゼネフは、全身からまばゆい光を放つ。

「お、おじいちゃん？」

嫌な予感がして、アイリスはゼネフを見やる。

「十五年前から。儂らは、あの城でとんでもない実験と研究をやらされてきた。この、フィアリウに強いられてな」

「……………」

レイエルはゼネフの覚悟を察して、後退して距離を取った。

アイリスとミイヴを手で制し、近づけさせないように配慮している。

「儂らは、作りたくもないユイフェヴを生み出し続けた。いつかはミズハを最高のユイフェヴとして仕上げるために。ユイフェヴを試作し続けて三年後、ミズハがシリスとノーシアから脱走してしまっ

「だ、だいじょうぶよ……」

ジェットはレイエルを追い抜き、身体を張って走るのを止めさせた。

呼吸が乱れている。

身体が衰弱しており、顔色がとても悪い。

アイリスを下ろして、ジェットは啞えていた黒刀を握り締め、トルミエを迎え撃とうとする。

「ジェット？ その、えっと……」

母親を目の前にし、アイリスは困惑している。

それを見兼ねたジェットは、三人にこう告げた。

「アイリス。アンタはふたりと一緒に、とにかく逃げろ」

その決意表明に、アイリス、ミイヴは驚いた。

ただひとり、レイエルだけはおかしいのか笑っている。

「や、やだよ」

アイリスはジェットのシャツの裾をつかみ、一緒に逃げようと瞳で訴える。

「いいから早くしろ。せつかく母親に逢えたんだ。少しでも長く、語らいたいだろ？」

「……っ」

ミイヴは浮遊を止めて地面に足をつけ、アイリスを横目にこう意見した。

「逃げるものか。あれは、紛れもなくばあ様。あんな生き地獄、本来ならば目を背けたい」

「ならどうして、やる気満々なんだ？」

ジェットは空いた右手で頭を押さえるが、帽子はアイリスにあることを思い出す。

「ワシは、逃げんぞ。この現実から、逃げるわけにはゆかぬ」

ジェットはちらりと、後ろのアイリスとレイエルを見やる。

レイエルは両手を膝に置いて、息を整えていた。

母親が心配なアイリスは、手から癒しの光を紡いで、活力を与え

ている。

「ミイヴ。あなたに、言わなくちゃいけないことがあるの」

「なんじゃ？」

振り返らずに、ミイヴは問い返した。

「あたしがトルミエを、王立魔導院を壊滅させたのは……ミイヴ。あなたのためでもあったのよ」

「な、なに？」

三人が、一斉にレイエルを見た。

「ノーシアはフィアリウの監視下にあった。トルミエはそれを知りつつも、そこにいる皆を危険な目に遭わせたくなくて、ノーシアを秘匿ひかくしていた。いわば、トルミエはフィアリウの操り人形だったのよ。実質魔導院は、フィアリウが支配していたんだから。それにフィアリウはね……魔導院が稼いだ金銭の一部を、ノーシアの研究に当てていた。そして、魔導院に優秀そうで適合しそうな子供がいたら、その子を……ユイフェヴの実験台にすべく。事故死扱いに見せかけて、ノーシアに移っていたのよ」

息を飲む、アイリスとミイヴ。

ジエツトは予想していた通りなのか、表情に変化はなかった。

ただ、近づくトルミエのほうを警戒している。

「そ、そんなバカな。ばあ様は……」

「フィアリウの暴挙に、トルミエは一部であるけど加担してたのよ」

「う、うそじゃ」

首を左右に振り、ミイヴはその事実を認めようとしなない。

「もしかしたらあなたも、ユイフェヴ化の実験として……左遷させんされていた可能性があるのよ」

「うそじゃあつー！」

レイエルの告白に、ミイヴは声を荒げて否定する。

「何がワシのためじゃ！ 貴様はそのユイフェヴと化して、人間として生きるのを止めておる。そんな墮落者だらくしゃの言葉などに、ワシはだまされんぞ」

「ふふつ。何とでも言えばいいわ。あたしは、自ら率先してユイフエヴとなった。こうでもしなければ、あたしは今頃……」
「わ」

ジェットはアイリスから羽根帽子を取り上げ、それを深く被った。帽子を取られたことに驚いていたアイリスだが、母親のレイエルの告白に、じつと耳を傾けている。

「あたしはシリスとノーシアを脱してから、薬の研究を続けていた。そのアルセスと一緒にね。その三年後だったかしら。フィアリウから、アイリスの存在を知らされたのよ。アルセス、あなたがあたしの下から去ってから、ね。その時、あたしはフィアリウの甘言かんげんに乗って……ユイフエヴとなったの」

「……………」
うつむいて、帽子を押さえて表情を隠すジェット。

アイリスはジェットのシャツを引っ張り、その顔を下から覗き込んでいた。

「今から三年前だったかしら。シリスと一緒に魔導院に属して、いろいろと調べたわ。フィアリウはあたしの存在に気づいていながら、トルミエには伝えていなかった。もしあたしがミズ八だと知ったら、トルミエが何をするか解ったからでしょうね。あたしもそれを理解していたから、今日に至るまで正体を明かさなかった」

顔を上げて、ジェットは目を細めながら問いかけた。

「ちよつと待て。シリスから聞いてるんだが。お前はなぜ、あの孤島にガキばつかの魔道士を派遣した？ アイリスを救うためか？

だとしたらなぜ、お前は動かなかった？ トルミエとやらを暗殺するためか？」

「ええ、そうね。けれど、ノーシアに向かうと言い出したのは、実はシリスなのよ」

「なんだって？ マジか」

「あたしが提案したことにして、あの子をリーダーとして向かわせるように策しると、ね。最初、あたしは反対したわ。けど、シリス

はわがままを通した。何せ、ノーシアはフィアリウの大事な箱庭よ。そう簡単に、アイリスを取り戻せるとは思ってなかった。それにね、幼い魔道士が……ノーシアにいる仲間の成れの果てを見たら、どう思うか。大方、予想はついていたもの」

レイエルはミイヴの顔を横目で確かめて、それからアイリスの頭を撫でている。

「そういえば、ワシも……あの城の中で、過去に見たことがある顔をいくつか……」

ミイヴの顔がこわばっていく。

「そういや、メイとか城でやりあつた魔道士が何人か……敵の顔見て、動揺してたな。ようやく、腑に落ちたぜ」

「く。今の話が本当だとするなら、いろいろとつじつまが合う。いや、それは全て真なんじゃな？」

ジェットとミイヴが納得したのを見て、レイエルは話を続ける。

「ええ。でも、トルミエがあなたを、ノーシアへ捨てるつもりだったかどうかは……あたしは知らない。それはないと思うけど」

「どうしてじゃ？ どうして、そう言いきれぬ」

「だって、おばあちゃんのあなたを見る目が……昔の、あたしを見る目と同じだったから」

「っ」

「トルミエおばあちゃんは、あなたを育てることで……償いをしていたのよ。おそらく、フィアリウからあなたを寄こせと言われても、断固として拒否したでしょう」

「だ、だったらなぜ……なぜ、ばあ様を。ばあ様を手にかけた」

握り拳を作り、それを震わせながら、ミイヴはレイエルに訊ねた。「許せなかったからよ。十五年前、おばあちゃんとおじいちゃんは

……虹として覚醒しつつあった、八歳のあたしを両親から取り上げ、人目につかないところに捨てたの。そこをフィアリウに拾われて、あたしとその親族全員が……フィアリウによってノーシアに監禁された。ただひとり、おばあちゃんだけがノーシアでなく外界にいた。

あたしは城にいる時、おばあちゃんだけが自由を得て、誰も助けようとはしてないんだと思い込んでいたの。脱走後しばらくして、魔導院にいると知ったわ。まあ、それもフィアリウが導いたものなんだけども。そこに属してからは……いつその憎しみをぶつけてやるうか。復讐をいつやるか、そんなことばかり考えていたわ。でもそれは、おばあちゃんを殺してから間違いだと知らされた。フィアリウの口から、ね」

「間違い、じゃと」

「あなたとアイリスが来る前に、あたしが魔道士の皆を見つけた時にね。フィアリウは、話するのに邪魔だからと、全員を抹殺したのよ。それを目の当たりにして、やりあう覚悟を決めていたあたしの心を……フィアリウは真実を話して、見事にへし折ってくれたわ。あたしが一方的に抱いていた憎悪は、見間違いだったと。トルミエおばあちゃんは、フィアリウにとっては操り人形で人質。そしてあたしは、フィアリウの手の中で転がされて、真実を知らずに誤って、おばあちゃんを殺してしまった。今思えば、フィアリウはあたしを長生きさせるために、生きることへの執念。それを根づけるべく憎悪の感情を育み、トルミエを殺すように仕向けたのかもね。我ながら、本当に間抜けだわ」

話し終えて、レイエルは大粒の涙をこぼした。

トルミエをじっと見据えて、ポケットから新しいハンカチを取り出す。

「あたしは知らぬ間に、フィアリウのオモチャにされていた。けどこれからはもう、そんなのに縛られない。あたしが今やるべきことは、あなた達を生かすために……トルミエおばあちゃんを、この手で天国へ送り届けることよ」

レイエルはハンカチを二枚浮遊させて、迎撃態勢を整えた。

「けっ。テメエひとりですべてを背負い込むなよ」

「アルセス……」

「オレは事情なんてどうでもいいのさ。目の前に危なっかしいもの

があるから、そいつを始末する。今までだって、オレはそうやって生きてきたんだ」

ジェットは黒刀を両手で握り締めて、刀身に黒い気をまとわせた。「それにもうすぐ夜が明ける。そうになったら、オレはポンコツだ。夜のうちに決着をつけないといけねえ」

「ふふつ。そうね」

レイエルはジェットの隣に並び、後ろのアイリスとミィヴを振り返る。

そのふたりは、地鳴りを立てて迫り来るトルミエを見て、おびえていた。

「あんのクソガキは、屋根上から高みの見物っぽいな」

「そうみたいね。いつ何をしてくるか解らないから、注意しないとね」

ジェットは後ろのふたり見て、こう言い放った。

「怖いんだったら、今のうちに逃げな。まだ距離はあるし、オレらが食い止めてみせる」

「や、やだよ」

「ワシは、ばあ様をあのような異形のバケモノとしたフィアリウを許せん。この場で倒さなくては」

アイリスとミィヴも勇気を出して、ふたりの隣に立った。

浮遊石のロッドを両手で構え、ミィヴは深呼吸を繰り返す。

アイリスはジェットとレイエルの顔を、交互に見つめていた。

「どうするの？ アルセス」

「んなこたあ、解ってんだろ。オレが前衛で、あいつを引きつける。三人は援護を頼む」

胸に手を置いて、アイリスはミィヴの真似をして深く呼吸している。

「ジェット」

「あ？」

アイリスは震えながら、ジェットのシャツの裾をつかんだ。

「す、すきっ」

「は？」

「わたしも、ジェットが大好きっ」

勇気を振り絞って、アイリスはジェットに告白した。

唐突だったので、他の三人はぽかんとしている。

「も、つて……な、なんだ？ アイリス、熱でもあんのか」

「ないよっ。もう、ジェットがわたしのこと好きだって言ったから。わたしも、好きだって返事したのっ。ちゃんと告白したのに、なんでそっけないんだろ……」

アイリスの発言を耳にしてすぐ、レイエルがジト目でジェットに抗議する。

「アルセス。あなた、あたしの娘に手を出していたのね」

「お、おい。オレは、な、なんかのか、勘違いだっ。オレは一言も、アイリスにそんなことあ言っつてねえぞ」

ミイヴの口元が歪んだ。

「言ったではないか。ワシも、目の前でジェットがアイリスを好きだと言っつたのを耳にしている」

「うんっ」

ミイヴとアイリスの主張を耳にして、レイエルはふうつと嘆息した。たんそく

当のジェットは、味方がいないことに口があんぐり。

「でも、あなたならいいや」

「あ？」

「あなたになら、アイリスを任せられる。あたしも、あなたのが好きよ。アルセス」

「ちよ」

ウインクしてから、レイエルはトルミエを見定めた。

ハンカチから投げナイフを数本受け取り、レイエルは両手にそれを構える。

頬を赤らめたジェットは右手で頬を張り、気合を入れ直した。

「グルルアアアアアアアッ!?」

「お」

ジェットは両脚を崩したトルミエから離れ、三人から注意がそれるように後方へ回り込んだ。

そのトルミエはジェットを目で追い、四足で迎え撃つとする。

「今のうちね。アルセスがトルミエを引きつけている間に、最大火力で撃ち込みましょう」

「しかし」

「どうしたの？ ミイヴ」

うつむくミイヴに、レイエルは同情の眼差しを向けた。

「ワシは重力と暗闇の魔法しか使えん。トルミエはあ様……ではないな。あやつの動きを止めるぐらいしかできん。決め手はレイエル。そなたに任せた」

「そう」

怪物とはいえ、眼前にいるものはトルミエに他ならない。

迷いがあるミイヴを決起させようと、レイエルはトルミエの影へナイフを投げた。

「ガグ、グガアアアッ?」

動きが鈍ったが、完全に押さえることはできていない。

ハンカチを引き寄せて、投げナイフを補充するレイエル。それから小声で呪文を口ずさんでいた。

「わ、わたしはどうしたら」

「ふむ。アイリスは、黒のレイポイントを作り出せるかのう?」

「くる? や、やってみる」

ミイヴに言われて、元気よくうなづくアイリス。

屈んで、地面に手を置き、アイリスは「くるくるくるくるおっ」と念じた。

「わわわっ」

すると、アイリスを中心に暗闇が広がる。

足下から発生するそれは、黒マナだった。

「ええっ？ これは驚きだわ。レイポイントを生み出せる力なんて、これほどありがたいことはない」

レイエルはハンカチをトルミエの頭上へ展開した。

「ハイドロスパウト」

妖しく輝く二枚のハンカチから、勢いよく水が噴出される。

「ギイギヤアアアアアッ！」

それを背中に受けたトルミエが絶叫する。

岩石の鎧は水を吸う。その重さに耐えられないのか、トルミエは転倒した。

「予想通り、水が有効みたいね」

レイエルは黒のレイポイントから離れて、屋根上へ跳ぶ。

「なら、ワシは補助をしよう。アイリス、レイエルに付き添うがよい」

「あ、うん」

アイリスはレイエルのほうへと走り、それを見送ったミイヴは呪文を口ずさむ。

「ヌギギギイッ」

近くにいたアイリスを見定め、トルミエは大きく息を吸った。

「させつかよ」

ジェットは背中の翼をはためかせ、羽根を飛ばしてトルミエを影縫いする。

しかし、月明かりによる影は薄く、トルミエの動きを微かに鈍らせるしかできない。

「まずい。伏せるお！」

「わわわわ」

アイリスはジェットが叫んだことに驚き、足を踏み外して転ぶ。

幸い、トルミエが吐き出した熱線は彼女の頭上を通過する。

それはいくつもの家屋を貫き、炎と黒煙をまき散らしていた。

「な、なんじゃと？ あんなものを受けたら、ひとたまりもないぞ」
「皆、できる限り正面には立っちゃダメよ！ “アクア・ブレス”」

レイエルは屋根上を走り、ハンカチから水を放出し続ける。

「グヌンアアアアアッ!?」

足を止めて、レイエルは呼吸を整えていた。

「無理をするな、ミズハ!」

「アルセス。あなたは、前衛の役目を果たしなさい。全力で、援護するから」

水を浴びて怒ったトルミエは、起き上がるついでに大地を揺らし
てみせた。

「あわわわわっ」

「く、この。『深淵の脈動』」ダイク・フレア

転げながらもミイヴは、トルミエを押さえるべく、その脳天に暗
黒の爆発を引き起こした。

「又ギヤアアアアアアアアアアアアアアアッ」

その衝撃でトルミエは再び、うつぶせに倒れる。

背中にある岩石に亀裂が走った。

「このレイポイントは、同属性の魔法の威力を高めるだけではない。
それを唱えるための精神負担も軽くしてくれるようじゃ。なんとも
ありがたい」

ミイヴはアイリスのほうへ走り、腰が抜けて立てないでいる彼女
に肩を貸した。

「あ、ありがとう」

「いいや。ワシもアイリスに助けられた。このまま近くにいるのは
危険じゃ。間合いを誤ってはならぬ」

ふたりは黒のレイポイントに戻り、レイエルとジェットの攻勢を
見守る。

「とりやああああ!」

「『スプラッシュ』」

ハンカチから放たれる水弾すいだんは、トルミエのまとう岩石をぬらして
ゆく。

黒刃は岩石のない関節を突き、どす黒い血をまき散らす。

「く。やっぱりオレの攻撃じゃダメだ。魔法で何とかしてくれ」

「だったら、その硬い皮膚をえぐってやるわ。そうすれば、あなたでも有効打が与えられるでしょう」

「あいよ。頼んだぜえ」

息の合ったふたりを見て、アイリスとミイヴは唇を噛み締めた。

「なんか、悔しい」

「ぬ？」

「お母さんとジェット、お似合いだもん」

「そ、そっちな」

ミイヴは力の差を見せつけられて落ち込んでいたのだが、アイリスはふたりの呼吸が合っているのに嫉妬していた。

「今はそれどころではない。しっかりと、ふたりを援護せねば」

「う、うん」

アイリスは足下を見て、何かを感じ取ったらしい。

「え〜っと、水を強めるためには」

「む？」

「ええいつ」

アイリスはトルミエへと手をかざし、その足下に赤いレイポイントを出現させた。

「あれは　な、まずいぞ」

ミイヴはアイリスの肩をつかみ、急いで修正させようとする。

「あわわわ」

揺り動かされて、それどころではないアイリス。

「クギヤアアアアアアッ！」

トルミエは口から黒煙をもらし、空に向けて極太の熱線を吐いた。その状態で首を落とし、近くの家屋を熱で断ち切る。

「な、ちよっと、アイリス！」

「ま、マジかよ。敵の攻撃を強化してどうすんだ」

レイエルとジェットが注意したので、アイリスは慌てて赤のレイポイントを消失させる。

「う、ごめんなさい」

頭を下げて謝るアイリス。

「判断としては間違っていないわ。でも、むやみにその力に頼らないで」

屋根上から指示を飛ばし、レイエルは巧みにハンカチを操り、そこからトルミエへ水弾を放つ。

ジェットは黒刀でぬれた岩石を斬りつけるが、やはり硬い。微かに残る人間の皮膚を狙って突いては、離脱を繰り返している。

「ガルガラアアアアアアッ」

レイエルとジェットを交互に見て、トルミエはダイヤモンドの爪でレンガの道路を掘り出した。

「な、なに？」

「も、潜るつもりよ！」

トルミエは地面に熱線を吹きつけて、ダイヤモンドの爪でそこに来た溶岩をえぐり、瞬間に地中に潜ってしまった。

「う、うっそでしょ？」

「まじいな。ダイヤモンドは普通、熱には弱いはずなんだが。……

あいつのはどうやら、魔法で強化されてるらしい」

「冷静に分析してないで、アルセス。皆を連れて逃げるわよ」

「だな」

レイエルは屋根伝いに駆けて、上から観察していた。

ジェットは黒のレイポイントに駆け寄り、アイリスを抱き上げる。

「わ。あ、ありがと」

「うむ。今すぐに退いたほう^{そいつ}がよさそうじゃ」

ミイヴは浮遊した状態で、先に走り出したジェットを追う。

「又グアアアアアアアアアアアッ」

黒のレイポイントの近くで半身を出したトルミエは、大きく息を吸っている。

「吐いてくるわー！」

レイエルの発言を受け、ジェットとミイヴは二手に分かれて物陰

に隠れる。

直後、ふたりの間に熱線が走った。

「野郎。本気で丸焼けにしやがった」

それが通った地面は、溶岩と化している。

「な、あれは」

レイエルは海のほうを指差し、ジェットはそれを見て、顔をしかめた。

「もう、朝なのかよ」

陽光が水平線から差し込んでいる。

急に眠気に襲われて、ジェットはアイリスを落としそうになった。

「だ、だいじょぶ？ ジェット」

「はいそうです。って答えたいが、さすがに無理だ。光を浴びて、ちよつち眠くなつてきやがったぜ」

その様子を見て、上からレイエルが指示を飛ばす。

「アルセス。あなたは暗がりには避難なさい」

「できつかよ。前衛なしのお前らが、あんなのと対峙して無事で済むわきゃあない。くそ、まだ夜だったら……勝機が見出せそうだったんだが」

半目のままで、ジェットはアイリスを下ろした。

それから家屋の壁に寄りかかり、呼吸を整えている。

「グルガアアアツ」

地面を這いずりながら、トルミエは地中から抜け出た。

「このままやりあつてもきついわ。ごほつ。う、ぐう………？」

発作が起きて、レイエルは大量に吐血する。

もうその顔には、生気が感じられなかった。

「なら、もう」

レイエルはそこから飛び降り、アイリスの傍に着地した。

「はあ、はあ……っ。あたしが押さえるから、皆は早く逃げなさい」

「え、や、やだっ」

アイリスはレイエルに抱きついた。

「わたし、お母さんにやっと逢えたのに。そんなの、そんなの……」

胸に顔をうずめて、アイリスは泣きじゃくっている。

「ふふ。もうすぐあたしは終わるのよ。その一歩手前で、あなたに逢えてよかったわ。名残惜しいのは、あなたの名付け親になれなかったことかしらね」

「名付け親？ アイリスは、いったい誰が」

向こう側にいるミイヴの問いに、レイエルは笑いながら答えた。

「フィアリウよ。それ以外にいないでしょ」

「そ、そうか。しかし、レイエル。そなたは何をするつもりだ」

「どうせ死ぬんだから、一花咲かせるのも一興じゃない？」

その発言に、ジェットとミイヴは目を丸くした。

右手で帽子を押さえているジェットは、悔しそうに齒噛みしている。

「ば、馬鹿なことを言うでない」

「あら？ あなたは、あたしが死ぬことを何よりも望んでいたでしょ」

レイエルは物陰から顔を出し、トルミエの様子をうかがう。

「そうかもしれないが、そうかもしれないが。まだ、まだアイリスとの時間を……」

物陰から飛び出そうとする勢いで、ミイヴはレイエルを説得する。

「悪いけどね、もうあたしは限界なのよ。死に損ないが、いつまでも……あなた達の未来を引きずっていたら、それこそ迷惑じゃない」
立っていられず、レイエルは片膝をついて深呼吸を繰り返した。
アイリスはレイエルにしがみついて、彼女の服を涙で湿らせている。

「じゅめんね」

「……え」

レイエルはアイリスを突き飛ばした。

「さあ、トルミエ。あたしはここよ」

レイエルは物陰から飛び出し、冷えた溶岩の上に立った。

羽の鱗粉を風に乗せて、虹色の輝きをまき散らす。

「や、やだああああっ！」

号泣するアイリスを、ジエツトは片腕で抱き留めた。

「アルセス。アイリスを頼んだわよ」

「……ああ」

「くふっ。げほ、がふ」

口から吐血し、咳き込むレイエル。

彼女は両手を合わせ、散らばった鱗粉を集中させる。

「お母さん……っ」

「もう、もういい。やりたいようにやらせてやれ」

「やだ、やだっ」

ジエツトは黒刀を地面に突き立て、両腕でアイリスを押さえる。

トルミエはもう、レイエルの眼前に迫っていた。

「さあ、いくわよ！ はあああああああああああああああああああああああ

ああああああっ」

鱗粉から生成したマナを凝縮し、光線を放とうとした時。

「にゅのんおおおおおおおおおおおっ」

「え」

レイエルの腕に、白く細長いものが噛みついた。

「よくも、トルミエちゃまをあんなふうにいいいいいいいいいいいい

っっ」

…… ロウスケラアだ。

ロウスケラアにマナを食われてしまい、レイエルは光線は威力が

充分でない。

「又ガアアアアアアアッ」

「な、まずい」

熱線の兆候。

足が動かず、レイエルは耳の羽をはためかせて、トルミエに背を向ける。

トルミエの死角から黒刃で斬りかかるも、ジェットの斬撃は意味をなさない。

「何度も爆発を叩き込んでも、剥がれんのはワシの魔力が低いからじゃ。くそ、シリスは何をしておるのじゃ!？」

レイエルが倒れたことに、激しく憤るミイヴ。

ジェットは顔をしかめたまま、トルミエの関節へと刃先を突き込む。

「ガルグウッ」

「ほらほら、こっちだぜえ」

着実に隙間を突いてくるジェットが気に入らないのか。

トルミエは起き上がりざまに、そちらへ目をやった。

「ロウス! ぼつつとしとらんで、お前を庇ったレイエルのために戦わんか!」

「な、お、オイラは……こ、こいつに?」

「さよう! レイエルは、レイエルはフィアリウに利用されていただけじゃ。お前は、お前は……本当に話を聞かないバカタレじゃな」

後ろでまごつくロウスケラアを叱りながら、ミイヴは泣いていた。

その涙を手でぬぐい、決意を新たにトルミエを見据える。

「グガアアアッ」

トルミエは四つん這いになって、ジェットのほうに振り向く。

おとり役を引き受けていたジェットはもうすでに、限界だった。

「アイリス! このままじゃ、オレはダメになる。頼むから、さっきの黒のレイポイントを出してくれえ!」

息も絶え絶えなジェットの叫びは、アイリスには届かない。

トルミエの背中を観察していたミイヴは、心配になってアイリスに寄り添う。

「な、なんで……あ、ああ」

返事のない母親を抱き締めて、アイリスは号泣していた。

どんな言葉をかけたらいいのか解らず、ミイヴもロウスケラアも悔しさに齒噛みする。

「く、くそつ。向こうに黒いのが残ってるが、もうあれは消えかか
ってるしな」

ジェットは強くなる陽光に、抵抗できなくなってきた。

「クルッガアアッ」

そのせいで動きが鈍り、ジェットはトルミエの爪撃を余裕を持っ
てかわせない。

「こお、このままじゃ……ちいつ。やりたくなかったんだが」
攻撃の手を休めていたジェットは、腹を括った。

帽子をアイリスのほうへ投げて、ジェットは刀身に黒く濃い気を
集中させる。

「覚悟しな」

低い声でつぶやいたジェットは、二足で立ち上がったトルミエに
気刃を放った。

「又ギリヤアアアアアアアアアアアッ!？」

それは胴体にある岩石の鎧を貫通し、どす黒い血をまき散らした。
「な、なんと。そのような大技があるなら、どうして最初から使わ
なかった？」

「ば、馬鹿言っなよお？ こいつあ、妖刀ようとうなんだよ。命を削る技な
んさ」

剣先を足下のレンガに突き立て、何とか意識を保っているジェッ
ト。

それを耳にしたミイヴは、驚きで目を白黒させている。

「い、命を削る……じゃと」

「大っぴらに使えるもんじゃねえのさ。それよりも、さっさと魔法
をぶち込め！ 起き上がんぞお！」

四つん這いになったトルミエは、口から砂を吐き出してジェット
を射すくめる。

いくつか亀裂がある岩石を見定めて、ロッドの先端をそこに向け
ながらミイヴは呪文を口ずさむ。

「なんだ？ くそ、何をしゃがんだよ。次は」

トルミエの行動に恐怖するジェットは、焦りからか日なたに出てしまう。

「ぐっ」

急いで日かげに戻り、ジェットは黒い刀身から禍々（まがまが）しい気を現出させる。

「な、止める。ジェットお！」

「今やらないで、いつやれってんだあああああああ！」
下に構えた黒刀を、勢いよく跳ね上げる。

「ギッラアアアアアアアアアアアッ」

放たれた黒い気刃は、トルミエのダイヤモンドの牙と頬を滑らかに切断した。

その反動で片膝を崩したジェットは、刀を支えにして立っている。

「アイリス。アイリスう！」

「……え？」

「さつき出した黒のレイポイントを、オレの付近に出しやがれ」
起死回生の一手をアイリスに求めるジェット。

「む、むり」

しかし、アイリスは首を左右に振った。

「な、なにっ？ ついさつきまで、得意げにやっていたらろくに近く落ちていた羽根帽子を拾い、それをレイエルの顔に被せている。」

泣きすぎるアイリスは、レイエルが目を覚ますと頑なに信じていた。

「く、くそ。このままじゃ、オレが持たねえぞ」

「なら、オイラにおっまかつせよよくん」

ふらつきながら立ち上がるジェットに、黒い光が吹きかかった。それをしたのは、ロウスケラアだ。

「な、テメエ。何しやがんだ……ん？」

大きく開けた口から、黒マナが放出されている。

それを浴びたジェットは、眠気がなくなり、代わりに力がみなぎ

ってきた。

「こ、こいつぁ、ありがてえ」
それを体感し、ジェットは昂揚する。

「黒マナ、じゃと？ ロウス、お前はいつの間」

「おいしそな魔力があったから、食べちゃったよ〜ん」

とぐるを巻いたロウスケラアは、答えながら全身をバネにして跳ねている。

その動きを挑発だと受け取ったトルミエは、ジェットからロウスケラアに狙いを変えた。

「グガウガアアアアアアッ」

前脚を振り上げて、爪をロウスケラアに突き立てようとする。

「む。“フレア”！」

すかさずミイヴは後脚に爆発を見舞い、トルミエをつつぶせに転倒させた。

「重心が不安定のようにじゃな。なら、揺さぶれば安定することはない」

ロットを構えながら、ミイヴは少しずつトルミエへ近づく。

「だが、いつまでもそうしたところで倒せやしないぜ。ミイヴ、弱点は水だろっ？ どうすりゃいいと思うっ」

「近くにあるのは、海じゃな。しかし、このような巨体を……どう、そこまで運べばよい？」

ジェットは黒マナを刀身にまとわせて、その黒刀をトルミエの前脚へ振り下ろした。

岩石の皮膚は、その刃によってバターのように削ぎ落とされる。

「クギアアアアアッ！」

「うわっ」と

爪による反撃を後ずさりしてかわし、ジェットは再びアイリスを見た。

「どうにかなりそうか、ジェット」

「ダメだ。アイリス、アイリスの力が必要なんだ。黒のレイポイン

トを出してくれえ!」

アイリスは泣きじゃくって首を横に振る。

ジェットとミイヴは活路をアイリスに求めるも、彼女はそれどころではない。

「しょくがない」

ロウスケラアは大口を開けて、遠くで残存している黒マナを深呼吸して引き寄せた。

「はもつ。ぶへえ」

吸収した黒マナを、ジェットへぶっかけるロウスケラア。

「ちよつち汚い気もするが、文句は言えねえ」

残りわずかな黒マナを用いて、ジェットは黒刀に気をまとわせる。

「又ゲアアアアッ」

二足で立ち上がるトルミエ。ミイヴはそれを待っていたのか。

「バインド」

を唱えて、逃げられぬよう固定する。

「さあ、今度こそ斬り捨てて」

下段に構えて、走りながら斬りかかろうとした矢先に。

「グルラウアアガガガアアルルスウオオオオオオオオオオオオツツツ!」

トルミエは咆哮した。

耳をつんざくそれは、周辺の家屋の窓ガラスをぶち割り、さらにその足下を溶岩に変えるほどの熱量を持っていた。

「あ、ぐ」

「ぬう」

「うう……」

ジェット、ミイヴ、アイリスの三人は、その絶叫で三半規管さんはんきかんをやられた。

平衡感覚を失い、その場にへたばっている。

「グルガアアアツ」

大口を開けて、トルミエはそこから黒煙を吐き散らす。熱線を放とうとしているのだ。

しかし、正面にいるジェットは逃げる事ができない。

「にや、にやにい？」

唯一、ロウスケラアだけは影響を受けていなかった。

「さ、させるもんかあ。よろろろくん」

とぐるを巻いて全身をバネにし、ロウスケラアはトルミエに飛びかかった。

「ば、ばか……やめろ」

ミィヴが手を伸ばすも、ロウスケラアには届かない。

「いったただきまゝす」

ロウスケラアは全身を大きくふくらませて、トルミエの顔に自分の口を覆い被せた。

「ぼふっ」

トルミエの熱線は、口を塞がれたことで不発に終わった。

「モグガ……ッ!？」

トルミエの鼻と口をロウスケラアが押さえたことで、熱線のエネルギーは行き場をなくして暴走している。

全身がふくらんで破裂寸前のロウスケラア。

至るところから黒煙が吹き出しており、いつ暴発するか解らない。

「や、やるな。あいつ」

「ロウスケラアは、魔力を主食とする絶滅危惧種^{ぜつめつぎくしゅ}。全身がゴムのようで、魔の探知に優れておる。ばあ様からそう聞いた」

「へえ。んなよりも、外さないと危なくないか？」

「じゃな」

ジェットとミィヴは立ち上がるうとしたが、足がすくんで動かない。

長い戦いの疲れと、つい先刻の咆哮の影響だ。

「うつせえなああああああああああああああつ！」

この場に、聞き覚えのある声が響いた。

「あ、あいつあ」

「か、カロス」

トルミエからロウスケラアを引き剥がすカロス。

ジェットとミイヴはそれを目撃し、言葉を失っていた。

「ぶっほええええええつ」

口から黒い煙と液体を出して、ロウスケラアは何度も咳き込む。

「ぶ、無事みたいだな」

そんなロウスケラアをポイ捨てするカロス。

「又グオウオオオツ！」

「ぼくにも、ぼくにもできることがあるんだ！」

カロスはトルミエの顎を蹴飛ばし、あおむけに転ばせた。

その全身は、赤く発光している。

「はあ、へへっ。メイ、今すぐに逝くよ」

そのひとり言は、ジェットを涙させた。

「うらあああああああああ！」

紅蓮の業火をまとったカロスは耳の翼で空高く飛び、トルミエの腹へと急降下した。

ふたりが衝突した時、凄まじい閃光と爆発が起きる。

三人と一尾は、その爆風に吹き飛ばされた。

「死なばもるともかよ。なんなんだ、ちきしよおー！」

犠牲者の尽きない戦いに苛立いらだつジェット。

拳をレンガに何度も打ちつけて、失いそうになる意識を痛みで繋ぎ止める。

「ばあ様……」

「ジェットお！」

アイリスの叫び声。

後退が遅れたジェットの腹に、ダイヤモンドの爪がかかる。

「あ、つぶねえ」

滴る鮮血。

ジェットは右手で腹部に触れて、再び刀を両手で握った。

「だ、だいじょうぶ？」

「傷は浅い。アイリス、そっちこそだいじょうぶか」

うなづくアイリスの瞳には、強い光が宿っていた。

「い、いつまでもめそめそしてちゃダメだよねっ。わたし、お母さんに逢えてうれしかったよ。でも今ここで、皆が死ぬのはやだもんっ！ だから、だから、わたしの声に応えて……」

アイリスが手を合わせて祈ると、あたり一帯を闇が覆う。

地面から、大量の黒マナが発生したのだ。

「これだけの広範囲を、黒のレイポイントにしたとゆうのか」

「ありがてえ。こんだけ暗闇があれば、オレは昼間でも働けるぜ」

ミイヴとジェットは歓喜する。

「てか、レイポイントってなあにっ？」

「し、知らないで使ってたんすか」

アイリスのひとり言に気づいたのは、ロウスケラアだけだった。

「レイポイントというのは、星そのものが循環させる魔の流れが表面化したものつすよ。火とか水とか風とかさういうの。つまり属性を持つマナなんよ。あんちゃはそれを、いつでもどこでも引き寄せて発生できるっばいよねーん」

ロウスケラアは、アイリスにいていねいに説明した。

「あ、そうなんだ。ありがと、白へびさんっ」

「おおっ。笑顔がフアンタあスティ〜ツクう」

ロウスケラアはアイリスの笑顔にひとめぼれした。

「傷が塞がってきたぜ。これも、アイリスのおかげだな」

「自然治癒力が増しておるといふのか」

「ああ。何せオレは、黒月鳥なんでね」

刀を振り下ろして、ジェットは黒い剣気を放つ。

しかし、それはトルミエの身体に触れた途端に消滅した。

「フォースフィールド」

ドスの利いた低い声で、トルミエが魔法を唱えた。

「な、なんだつてえ？」

トルミエの全身が、奇妙な光に包まれている。

ジェットはたまらず離れて、トルミエの様子をうかがう。

「ばあ様が得意としていた、防御魔法か」

「な、なに？ ど、どうすりゃいいんだ」

「あれは、短時間だけじゃが……あらゆる攻撃を無効化する障壁。

あれが発動している間は、何をしても無駄じゃ！ 逃げるぞ」

ジェットは地面に広がるレイポイントから、黒マナを集めて全身にまとわせる。

ミイヴはロッドに、ロウスケラアは口内に黒マナを取り込み、トルミエに背を向けて逃げ出した。

「お、お母さん」

アイリスはレイエルの前で手を合わせ、「ごめんね」とささやいた。

名残惜しげに立ち上がり、アイリスはミイヴとロウスケラアを追いかける。

「海は反対側だ。遠回りになるが、裏道を通りながら港へ向かうぞ！」

トルミエが一番近いジェットは黒刀で家屋を斬り捨て、その進行ルートを潰してゆく。

「広い通路を歩かれると面倒だからな」

「それ以前に、ばあ様は地面に潜れるのじゃぞ。そのようなことをしても」

「ちい。いちいち突っ込むんじゃねえよ！」

ジェットはふたりと一尾に追いつき、黒刀を啜えてからアイリス

を抱き上げた。

ミィヴはロウスケラアを身体に巻きつけて、浮遊して移動する。

「お母さああああああああんっ！」

レイエルの亡骸を背にして、三人と一尾はひたすらに港を目指した。

「はあ、はあ、はあ」

「ジェット。だ、だいじょぶ？」

「平気だ。それより、後ろはどうなってる」

「あ、うん。おっきなドラゴンが、家を手で払いながら来てるよ」

「なにい？」

ジェットはもう息切れしていた。

黒マナがあるとはいえ、陽光の影響は彼の意識を蝕ほじむんでいる。

「どうした？ ジェット。アイリスが重いとかい出さぬじゃろっ
な」

「むっっ」

ミィヴとロウスケラアは、浮遊石の効力で悠々（ゆうゆう）と移動していた。

「お前らは楽ちんでいいやな」

「そうでもないぞ。先刻いただいた黒マナのおかげじゃ。こうでもないないと、足の長さの差でジェットに追いつけんからな」

「そ、そうかい」

ジェットとミィヴが言葉を交わしていた、その時。

「げほっ」

突然、アイリスが咳き込んだ。

「あ、え……？」

彼女の口から、赤い血が一滴落ちる。

「ど、どうした」

「う、なんか急に胸が……苦しい」

アイリスに異変が起きて、皆は足を止める。

「くそつ。ミイヴ、しばらくあいつはオレが押さえる。アイリスは任せたぞ」

「そ、そうか。ロウス、お前はジェットの支援してやれ」

「あいあいさ」

アイリスを下ろしたジェットは、黒刀を左手に持ってトルミエへと接近する。ロウスケラアもそれに続いた。

ミイヴはふらつくアイリスを抱き留めて、背中をさすってあげる。

「だ、だいじょうぶか？」

「う、うう」

アイリスの顔色が悪い。

ふと、ミイヴはあることを思い出した。

「そういえば、そのスカートのポケットに」

レイエルがアイリスに渡した小瓶。

それを手に取り、ミイヴは手の平に何錠か乗せた。

「ほれ。これを飲むのじゃ、アイリス」

「え？ あ、う、うん」

水なしで、それを飲み込むアイリス。

「うっ。につがあい」

「良薬は口に苦し。そういうものじゃ」

ミイヴはアイリスの背中をさすり、ちらりとジェットのほうを見た。

「んなるお」

フォースフィールドの効力は消えており、ジェットの黒刀による斬撃は、トルミエの腹部を滑らかに走る。

「クギアアアアアッ！」

肉体が欠損することで、重心バランスが崩れるらしい。

激しくじだんだを踏むトルミエは、よろけながらもジェットとロウスケラアを見下ろしている。

「のよろろ〜ん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7581s/>

青空が見たいよ

2011年8月11日03時25分発行